

科に学ぶ。社会福祉施設などに勤めながら、「こどもペン」*「子ども村」*など児童雑誌に童話を投稿、一九五〇年、いぬいとみこ、佐藤さとる、長崎源之助らと同人誌「豆の木」をはじめ。五五年より文筆生活に入る。動物や野鳥に興味をもち、その生態をしつかり踏まえた上で、人間とのかかわりを描いた作品が多い。六四年に『子ばとのクウク』、『風の村』、六五年に『ゾウのかばん』、六六年に『すずめの手紙』、六七年に『ジャングルのほこぶね』などを出版したが、七一年に出した絵本『はしれクラウス』もそうだが、七二年の『大仏建立物語』*あたりからノンフィクション作品が目立ってきた。石川光男、砂田弘、*木暮正夫、岡本文良、*浜野卓也らとジュニア・ノンフィクション作家協会をはじめたことが影響したかもしれないが、もともと神戸には調べて書く性格があり、ノンフィクションに力を発揮するようになった。『大仏建立物語』も優れていたが、七五年に出版した『元禄の白い塩』も、元禄忠臣蔵を経済面から事件の核心に迫った力作である。クリスチャンの神戸にとって当然のことかもしれないが、最近ではキリスト教関係の作品が多い。八二年に『愛をつたえた青い目の医者へボン』、八三年に『キリスト』『新渡戸稲造』などがある。八二年、ノンフィクション児童文学の会設立、会長になる。

(長崎源之助)

キ

木内高音

たかうち

一八九六—一九五一(明29—昭和26) 雑誌編集者、童話作家。長野県出身、早稲田大学英文科を卒業。鈴木三重吉主宰の赤い鳥社に入り、編集に従事、その後も一貫してジャーナリストの道を歩み、中央公論出版部長、「婦人公論」編集長などを務める。児童文学創作は自身のかかわった「赤い鳥」*にはじまり、処女作『お耳の葉』(一九二三)以下三〇編を同誌に発表。しかし、『水菓子屋の要吉』や『お化け倉の話』など社会性のある数編の創作を別とすれば、多くは外国童話の翻案ないしはそれにヒントを得たものであった。『赤い鳥』*終刊後は目立った作品はなく、第二次大戦直後、友人藤田圭雄の編集した童話雑誌「赤とんぼ」に、子どもたちの明日を切り拓こうとする生き方を描いた「建設列車」を発表。作品集として「建設列車」(四六)がある。なお、中央公論社在勤中に、鈴木三重吉の『綴方読本』(三五)と豊田正子の『綴方教室』(三七)

を世に出した功績も忘れられない。

(岡田純也)

戯曲

きょく

演劇として上演されるものの台詞

(俳優の話すことば)とト書(俳優のしぐさや動きの指定や、舞台装置、照明、音響効果などの指定を含む)を文章化したものである。戯曲ということばは、中国の宋代から用いられているが、欧米でいうドラマとは本来、「行う」「行動する」という意味のギリシア語である。すなわち、俳優の台詞や動作による劇的行為を文章として記したものが戯曲なのである。戯曲は、演劇という時間的空間的に強い制約をもった表現形式という性格から、登場人物の心理や行動を現在進行形で示すという独自の手法によって書かれる。したがってこれを鑑賞するためには、俳優の舞台上での行為をイメージしながら読むということになる。戯曲には上演を主体とした「上演台本」「脚本」といった呼び名にふさわしいものもあるし、文学性の濃い劇文学というべき体裁をもった戯曲もある。児童劇や人形劇のための戯曲は、単に「児童劇」「人形劇」と略称するのが普通である。

(岡田 陽)

菊岡久利

きくおか

一九〇九―七〇(明42―昭45) 詩

人、小説家、劇作家。本名高木陸奥男。弘前市に生まれ、東京の海城中学中退。アナキストとして投獄されること数十回。横光利一に師事して菊岡久利の名をもらい、詩集『貧時交』(一九三六)などを刊行、戦後は

『銀座八丁』(五二)など小説も書いた。児童向きの仕事としては、戦前の「*コドモノクニ」、戦後の「銀河」などに童話や少女詩を発表。また、劇団東童のために書いた児童劇『野鴨は野鴨』(四〇)、『都会の野鴨』(五二)は、児童演劇史に記憶される。

(羽鳥徹哉)

菊田 一夫

きくた

一九〇八―七三(明41―昭48) 劇作

家、放送作家。本名菊田数男。横浜市生まれ。生後間もなく両親が離婚し、菊田吉三郎の養子となるが少年時代を台北、大阪、東京で放浪生活を送る。詩人サトウハチローに師事し詩作を学ぶがたわら、浅草公園劇場の芸芸部に所属しエノケンやロッパの一座にオペレッタの脚本を数多く提供した。その後古川緑波一座の座付作者として東宝に入社し『道修町』『花咲く港』の脚本を書き演出も手がけた。戦後はフリーとなりNHKの連続ラジオドラマ『君の名は』のヒットで一躍メロドラマの代表作家となる。このドラマは放送時間帯に銭湯の女湯が空になるというような社会風俗を引き起こした。また戦後の浮浪児の更生問題を扱った放送劇『鳩の団九郎』に続く『鐘の鳴る丘』(一九四七―五〇)は戦後の子ども状況を考察する上で欠かすことができない。一九五〇年東宝取締役に就任、芸芸路線を定着させ、ミュージカルを手がけた。

(佐野美津男)

菊池 寛

きくち

一八八八―一九四八(明21―昭23) 小説家、戯曲家。本名寛。香川県高松市の生まれ。東京

高師、一高などに学び、のち京都大学英文科卒業。一高時代の友人芥川龍之介・久米正雄・松岡譲らとはじめた第四次「新思潮」（一九一六―一七）に戯曲『屋上の狂人』、『父帰る』、小説『身投救助業』、『三浦右衛門の最期』などを発表した。が認められず、大学卒業後しばらく時事新報社社会部記者として働く。一九一八年「中央公論」に発表した『無名作家の日記』、『忠直卿行状記』の二作で、文壇での地位を確立する。菊池には三つの顔がある。第一は初期の戯曲や短編小説を通してみられる純文学作家としての顔であり、第二は『真珠夫人』（二〇）にはじまる通俗小説作家としての顔、そして第三は二三年の『文藝春秋』の創刊、三五年の芥川賞・直木賞の設定、三六年の文芸家協会設立などを通して築きあげた文壇の大御所としての顔である。児童文学とのかわりには、ほかの文壇作家同様、鈴木三重吉に勧められ、『赤い鳥』に寄稿したのにはじまる。『一郎次二郎次三郎次』（一九四）、『納豆合戦』（一九九）、『艦長の子』（二〇・六）などの初期の童話は、『赤い鳥の本』第四冊、『三人兄弟』（二二）に収録されている。

外国翻案もの、民話調のもの、歴史に取材したもの、現代ものとレパートリーは広く、物語性にも富むが、教訓臭がまわりつくのが欠点といえる。なお、彼の児童ものの再話、翻訳は枚挙にいとまがないほどだが、その多くに代筆が混入していることには注意を要す

る。芥川龍之介と共同編集刊行した『小学生全集』（二七―二九）全八八巻の仕事も忘れられない。四八年三月六日歿。（関口安義）

菊池 正 きくち ただし 一九二七（昭二） 児童文学

作家。東京に生まれ、立川専門学校経済科、東京都臨時教員養成所を卒業。教職のかたわら文芸同人誌「作家群」「文苑」「文化」を経て小説・シナリオ・詩歌を書いたが、一九六〇年ごろより児童文学の創作をはじめ、多摩児童文学会「子どもの町」同人となる。七一年に、戦時中の少年を描いた短編集『母と子の川』、圧政に抵抗する農民を描いた連作歴史短編集『野火の夜明け』（一九七二）を相ついで出版し、翌年『母と子の川』により第五回日本児童文学者協会新人賞を受賞。『つばき屋敷のひみつ』（七三）、『美しい季節』（七四）など活発な執筆活動の中で、七六年、発心して仏道に入り得度、禪僧として雲水修行し法名大玄正道となるも創作と後進の指導に専念、『おしゃかさま』（七七）、『ぼけもの千両』（七九）、近著に原爆にかかわる『ヒロシマの子守唄』（八五）などがある。（桜井信太）

菊池知勇 きくち ちゆう 一八八九―一九七二（明二二―昭四七）

歌人、教育者。岩手県室根山麓に生まれ、岩手師範卒業。盛岡城南小学校に勤務。短歌を好み、若山牧水の「創作」に創刊号から寄稿。かたわら小学生の綴方教育に関心をもち、一九一七年上京、慶応幼稚舎教員と

なり、綴方教育を推進する。二六年、日本綴方教育研究会を結成、その機関誌として日本で最初の綴方雑誌「綴方教育」を創刊。四一年の廃刊まで綴方教育界での先導的役割を果たした。『児童文章学』六卷（一九二九）、『綴方教授細目の新建設』（三四）などの編著がある。戦後は短歌雑誌「ぬほり」の刊行に力を注いだ。

貴司悦子

（桑原三郎）
一九〇三〜四一（明36〜昭16） 児童文学作家。本名奇二恵津。大阪府三島郡春日村（現茨木市）に生まれる。一九二〇年大阪府三島高女本科卒業。二六年に作家貴司山治（本名伊藤好市）と結婚し、夫の勧めにより童話創作を手がける。童話集『村の月夜』（一九三〇）、遺稿集『蟻の婚礼』（四二）がある。生活童話を中心とした『村の月夜』には、子どもの思考力育成のためには「本当のお話」が必要であるという考えが示されているが、生活童話全盛であった当時の日本児童文学の状況もうかがえる。また、代表作となった『蟻の婚礼』は、夫山治から生活童話を打破する試みとして動物の生活を擬人法で描いた童話を示唆され、ファープル、ダーウィン、横山桐郎、メーテルリンクなどの著作に学んで、完成された作品である。『科学と空想のみことな統一』による空想物語として評価を受けている。四一年肺疾のため逝去。（長戸優子）

岸田杢子

（きした ありこ） 一九二九（昭4） 詩人。児童文学作家。東京に生まれる。父は劇作家、小説家、翻訳家の岸田国士、妹は女優の今日子である。東京芸術大学油絵科卒業。画家を志望したが、胸部疾患のため一〇年ほど療養、詩や散文を書きはじめた。同級生中谷千代子の絵による『かばくん』（一九六二）は世界的に評価の高い絵本。同コンビの絵本に『ジョジョのかんむり』（六〇）、『かえってきたきつね』（七三）。詩集『だれもいそがない村』（八〇）、『木いちごつみ』（八三）などがあり、作詞でも活躍。（尾上尚子）

岸 武雄
（たけし） 一九二二（明45） 児童文学作家、教育家。岐阜県山奥の村に生まれ、父は小学校教師。岐阜師範卒業後、教職に従事する。教師体験に基づいた著書に『蟻のころろ』（四三）がある。第二次大戦ののち、岐阜大学附属小学校主事時代、朝礼の時、生徒たちに話をしたのがきっかけで創作を志し、短編集『子どもが耳をすます時』（六二）を刊行する。一九六二年、川口半平、赤座憲久らと「岐阜児童文学研究会」を創設。本格的に創作活動をはじめ。『もぐりの公紋さ』（七〇）をはじめ、野間児童文学賞推奨を受けた『千本松原』（七二）、『炭焼きの辰』（七二）、『ろくろと山の百姓たち』（七三）、『あほろくの川だいいこ』（七四）、『花ぶさとうげ』（七九 小学館文学賞受賞）など、地域の歴史的社会的事件を素材とした作品を発表する。歴史の流れの中で、権力の非情さに打ちのめされながらも、な

童文学作家。東京に生まれる。父は劇作家、小説家、翻訳家の岸田国士、妹は女優の今日子である。東京芸術大学油絵科卒業。画家を志望したが、胸部疾患のため一〇年ほど療養、詩や散文を書きはじめた。同級生中谷千代子の絵による『かばくん』（一九六二）は世界的に評価の高い絵本。同コンビの絵本に『ジョジョのかんむり』（六〇）、『かえってきたきつね』（七三）。詩集『だれもいそがない村』（八〇）、『木いちごつみ』（八三）などがあり、作詞でも活躍。（尾上尚子）

お自分の信じる方向に生きた人々を、また、社会の底辺で貧しくとも懸命に生きた人たちの姿を、方言を生かした語り口で描き続ける一方、五〇年に及ぶ教育活動の中から生まれた『風の鳴る家』（七三）、『クマ撃ちの日まで』（八〇）、『フララ、フララノ』（八一）、『走れ！ネコ先生』（八二）などは、人間の生き方、真の教育の在り方を問うもので、現代の教育界の抱える課題にアプローチする。また、教育に関する著書も多数ある。その一方で、児童文学の普及にも力を注ぎ、七三年以後『岐阜児童文学会』の同人らと、子どもや母親向けの月刊雑誌「コボたち」を発刊し続ける。（鶴生美子）

岸田辰弥

たつや ちんや

一八九二—一九四四（明治25—昭和19）

劇作家、演出家、俳優。明治の新聞人、実業家として知られる岸田吟香の五男に生まれた。画家の劉生りゅうせいの弟。青山杉作、村田実らが結成した新劇団とりで社（二九一二）に参加し、のち帝劇洋劇部の研究生を経て伊庭孝の新星歌舞団で活躍。＊小林一三の招きで宝塚音楽歌劇学校の教師となり、歌劇作者、振り付け、演出者として宝塚レビューの黄金時代をつくった。有楽座子供日のお伽劇や宝塚少女歌劇のお伽歌劇の脚本を数多く執筆。お伽歌劇など一二編を収めた『少女歌劇脚本集』（二三）がある。（富田博之）

岸田劉生

りゅうせい

一八九一—一九二九（明治24—昭和4）

洋画家。東京に生まれ、東京高師附属中学校を中退。

葵橋洋画研究所に学び画家になった。白馬会展などに入選。「白樺」同人と親交を結び、フユウザン会、草土社に出品。二科賞を受賞。春陽会や大調和会の創立に参加。繊細で気品高い装飾性のある写実画を描いた。愛娘をモデルにした「麗子像」連作ほかの童女像は、純真無垢な子どもの秘めもつ意志力を描出した名作として知られている。大正中期、山本鼎を中心に児童自由画運動が起こった時、それに批判的な見解を述べた『図画教育論』（一九二五）を出版、また児童図書の装丁にもユニークな手腕をみせた。（小崎軍司）

騎士道物語

のきだりも

ヨーロッパ中世の物語。ラテン語とフランス語の合体によって生まれたロマン語（俗語）によってつくられた物語詩、または散文。貴族の趣味に合致した宮廷文学で、『宮廷風騎士物語』と呼ばれる。一二世紀末から一三世紀にかけて南フランスで生まれ、トルヴァドールと呼ばれる吟遊詩人がつくりかつ歌った。物語の中心は、「ブルターニュ物語」と呼ばれるケルト系の伝説で、今日では次の四種に大別される。（1）円卓物語。アーサー王伝説が中心で王に臣従する騎士の冒険と恋が描かれ「ランスロット」「イヴァン」があり、クレチアン・ド・トロワが代表作家。（2）騎士トリスタンと王の結婚のあいてイズーの宿命的な悲恋物語。トマ、ベルールの作品が現存。詩人コクトーが映画化した。（3）聖杯物語。はりつけになったキリス

トの血を受けた聖杯を探求する苦難の旅の物語。『パルジファル』（クレチアン・ド・トロワ作）が代表作。(4)純愛物語。アーサー王伝説と無関係の物語で現実性が濃く歌物語『オーカッサンとニコレット』がある。

（塚原亮二）

岸辺福雄

（きしべ）

一八七三—一九五八（明61昭33）

教育者、口演童話家。鳥取県岩美郡大岩村に、田池田藩の藩医佐藤秀林の次男として生まれる。旧制の兵庫県御影師範を卒業、兵庫県の小学校の教師時代に京都府久美浜町の岸辺かよと結婚、岸辺姓を名乗る。早くから口演童話を子どもたちに語り、遊戯指導の研究に取り組み、『実験新遊戯』（二八九九）、『遊戯的教授法』（一九〇二）など、この分野での先駆的な著書を出版している。これらの著書は佐藤姓で書かれ、近年、復刻版が出ている。一九〇二年には上京して青山師範講師となるが、翌年、牛込区納戸町の自宅を園舎に東洋幼稚園を創立、一〇年には神田北神保町に、新園舎と東洋家政女学校とを併設して、幼児教育と女子教育に専念した。同じころ、巖谷小波や久留島武彦が口演童話をはじめるが、福雄は幼児教育の立場から口演童話を実践し、その体験をもとに、『お伽噺仕方の理論と実際』（〇九）を出した。この本は我が国の口演童話の理論書、指導書としては、最も早く書かれたものとして知られる。武彦が回字会という口演童話や雄弁術の勉強会を主宰

したのに対して、福雄は喃々会なんなんかいを指導、小波、武彦とともに、子どものための重要なコミュニケーション・メディアだった口演童話の三人の先達として、並び称される。福雄はまた、大正デモクラシーの時代思潮を背景に、北原白秋、山本鼎、片上伸らによって結成された日本自由教育協会の同人として、芸術教育運動に参加したり、四回にわたり欧米を視察、東京市の市会議員を務めて、障害児教育にも先駆的役割を果たすという活動もしている。東京市の身障児のための施設「光明学園」の創設にも尽力。神田の東洋幼稚園と東洋家政女子学校は第二次大戦時の強制疎開によって消失したが、現在も渋谷区代々木上原には、岸辺幼稚園があって、福雄の事業は遺族によって受け継がれている。口演した主な童話を集めた『岸辺福雄名話集』（四〇）が残されている。

木島 始

（きはしま はじめ）

一九二八—（昭31）

（富田博之）

文学者。本名小島昭三。京都に生まれる。東京大学英文科卒。戦後の民主主義文学運動の中から現れた詩人で『木島始詩集』で一九五三年スタート。左翼前衛詩運動の中心だった関根弘らの「列島」グループに所属。ついで、その後身的色彩もある現代詩の会にも参加、詩・小説・評論にわたって活発な活動を続けた。アメリカ文学・文化に対する関心は深く、評論集『詩・黒人・ジャズ』などがあるが、ヒューズ『ジャズの本』、

*ヘントフの少年小説『ジャズ・カントリー』の訳者としても知られる。多産かつ意欲的で、手法上の試みをすることに、関心をもつこの詩人は、童話に対する関心も持続していて、『考えろ丹太!』をはじめ、『緑の部屋』『あそびあいてはおばあさん』などがある。鳥羽僧正『鳥獣戯画』の画面を再構成してつくった絵本『かえるのこぼろび』は異色で話題になった。(三木 卓)

擬人化^{かじん} 人間以外の動植物やその他のものに、人間と同じ属性を与えて描く方法をいう。たとえば、犬が人間のことばをしゃべるといったこの方法は、児童文学によくみられる方法の一つである。これは、人間以外の動植物やその他のものに、人間と同じ属性をみる、子どもの中のアニメイズム傾向の強さに対応するものであって、昔話にも普通にみられる。ただ、昔話の擬人化は、ごく少数の例外を除いて、動植物などの自然物に限られる。それを大きく人工物にまで領域を拡大したのは、アンデルセンであった。アンデルセンは、びんの首やぼろぎれまで含めて、さまざまなものの擬人化を試みた。一九三〇年前後からは、この擬人化は機械類にまで及ぶようになった。バートンの絵本『いたずらかんしゃ ちゅうちゅう』(一九三七)は、その代表的なものの一つである。こうした方法をマシーン・アニメイズムということもあるが、その後、これはことに絵本の領域で、大きな広がりを見せた。我

が国でも、阿川弘之文・岡部冬彦絵『きかんしゃやえもん』(五九)などに、その例をみることが出来る。なお擬人化には、動物なら動物の生態に即した擬人化から、本来その動物がもつ属性まで完全に無視した擬人化まで、そのレベルは実にさまざまである。(安藤美紀夫)

キセリヨフ ウラジミール・リ Владимир Леонтьевич Кисельб 一九二一 ソビエトの作家。ウクライナのキエフ市近郊に生まれる。「ウクライナ・プラウダ」紙の記者としても働く。児童文学作品としては、ロシア共和国国際文学コンクール優秀作品『少女と鳥のひこうき』(一九六五)や暴走族の少年たちを主人公にした『Веселый роман 陽気なロマン』(七〇)、『Тюбоб и кривошка 愛とじやがいも』(七九)など現在のソビエトの少年少女たちの気質をよく描いたものがある。

北川幸比古^{きたがわひこ} 一九三〇 (昭五) 詩人、児童文学作家。東京都新宿区に生まれ、早稲田大学文学部国文科を卒業。戦前の童話作家、北川千代の甥に当たることや、自由主義的な家庭に育ったことなどが、

後年、児童文学を志す動機となったかもしれない。学生時代より詩を書き、一九五一年、処女詩集『草色の歌』を私家版として出版。堀口大学の序文、谷川俊太郎のあとがきを得た。雑誌「銀の鈴」編集部に勤務ののち、詩書出版社を興したりしたが廃業。学習誌、児

童雑誌、放送などのフリーライターとなる。その後、六六年、福島正実、内田庶、亀山龍樹、中尾明らと少年文芸作家クラブを結成、SFを中心とした児童大衆読み物の開拓を志す。代表作には『宇平くんの大発明』（一九八一）、『ロケットさくら号のぼうけん』（八四）、『とびだすエンピツ』（七〇）など。八三年、限定出版した『むずかしい本』（八二）によって第一回新美南吉文学賞を受賞した。

北川民次

きたがわ たみじ

一八九四

（明27）

画家、児童美術教育家。静岡県榛原生まれ。早稲田大学中退後、渡米し、ニューヨークとメキシコシティの美術学校を卒業。一九三一年メキシコのタスコの野外美術学校長として子どもの美術教育の実践に携わる。画家としてはシケイロスらとの交遊、影響により野性的でヒューマニズムに貫かれた骨太な作品を発表。帰国後、四九年名古屋市東山動物園内に名古屋動物園美術学校を開設し、久保貞次郎とともに創造美術運動を推進する。

『絵を描く子供たち』（一九五二）、『子どもの絵と教育』（五三）などの著書がある。

北川千代

ちよがわ

一八九四—一九六九（明27—昭44）

（上野浩道）

少女小説作家、童話作家。埼玉県大里郡大寄村（現深谷市）の日本煉瓦会社の社宅に生まれる。父は同工場長。三兄と妹二人、弟三人がいる。一九〇五年三輪田高女（東京）に入学したが病弱で中退（一九〇八）、この前後か

ら「少女世界」「少女の友」に投稿、細川武子、森田たまらと編集者沼田笠峰の「少女読書会」のメンバーとなり、同誌六卷六号に応募少女小説『友情』が掲載される。東大英文科生江口渙と結婚（二五）したが、病氣、神経衰弱などで波風が絶えなかった。一九年「赤い鳥」に童話『世界同盟』を発表。観念的作品だが、反戦、世界平和を熱望する一念は、千代がいわゆるありきたりの少女小説作家ではなかったことを物語っている。さらに夫の渙とともに左傾、日本で最初の婦人社会主義団体の赤瀾会に入会したが、渙とは不仲となり離婚、やがて足尾銅山ストのリーダー高野松太郎と東京三河島で同棲生活に入る。高野は活動家として全国を飛び歩き、千代は三河島で娼婦廃業支援の方途を探るなど意欲的に活動、二四年「令女界」に少女小説「新しき朝」の連載執筆開始、「帰らぬ兄」（二四）、「蝕はめる花」（二五）、「楽園の外」（二六）などをやつぎばやに出版して流行少女小説作家の地歩を固めた。さらに講談社から『絹糸の草履』（三二）、「春やいづこ」（三四）を刊行する。プロレタリア児童文学の旗本楠郎が「不自由な発表機関の中で、恒に最も進歩的な児童文学の建設に努力されていることに敬意」との私信を受ける。その後世田谷弦巻に転居するが、四〇年、与謝野鉄幹夫妻の所有地であった千葉県蓮沼村の住居に移住する。四三年夫高野死亡。「二月九日をもつてわが人生おわ

る」と記すほどの熱愛ぶりであった。この前後から幼年童話も盛んに執筆刊行する。四五五年の終戦以後も精力的に少女小説、幼年童話を刊行したが六五年九月、心臓と高血圧で成東病院に入院、一〇月一四日死亡する。六九年、日本児童文学者協会は少女小説の開拓者としての千代の業績を記念し、新人登竜門「北川千代賞」を設定した。千代が生涯を通して追求したテーマは貧乏の告発と幸福とは何かの二つであったが、彼女の場合はそれが書斎だけのことではなく、自身の社会運動の実践を伴って追求されていたということである。また千代の作品全体を見わたすと次のような特徴がある。(1)貧乏を素材として促えながら、それを描く手法が多種多様であること。(2)作品の完成度において長編よりも短編が優れていること。(3)その作品歴については、前期は貧乏告発現実否定によって、後期は幸福の追求、現実調和の模索といった姿勢で執筆されていることである。

「花さく小道」^{はなさくこうみち} 少女小説。はきだめ小路と呼ばれる漁村に若い小学校の女先生が下宿するが、先生は近所の子どもたちの勉強をみてやり、料理を教え、漁師のおかみさんたちに共同炊事の便利さを説き、ミシンを教えて子どもたちの服装を改良し、はては「やせた土の中に根をおろして、ふまれても、ふまれてもまけないで、いきおいよくさく」マツバボタンの種をま

く。若い女先生が、貧しい住民へ働きかけをする明るい生活物語で、作者の実人生への能動的姿勢がそのまま作品に結晶されている。

【参考文献】古田足日「北川千代解説」(一九六七『北川千代全集』講談社)、浜野卓也「北川千代解説」(一九七八『日本児童文学大系』一二巻 ほるぷ出版) (浜野卓也)

北沢楽天^{きたざわ らくてん} 一八七六—一九五五(明9)昭和30)漫画家。本名保次。埼玉県大宮市の生まれ。東京神田錦華小学校卒業後、絵画研究所で洋画を学び、のち横須賀の春瑞塾で日本画を修業した。一八九五年横浜の英文雑誌ボックス・オブ・キューリオス社に入社。漫画家フランク・ナンケベルに師事し、同誌に作品を発表して認められた。九九年、福澤諭吉に招かれ、時事新報社に移り、政治風刺漫画を描き、へ楽天漫画として知られるようになる。一九〇五年(明38)「東京パック」を創刊、十数万部を発行し、漫画ブームをつくり、多くの門下生を育てた。一四年羽仁もと子によって「子供之友」が創刊されると積極的に協力する。二九年ヨーロッパ、アフリカなど一年半の旅をし、途中パリで日本の風俗画の個展を開く。第二次大戦後は郷里大宮市に住み、自適の生活を送った。旧居跡(大宮市益裁町一五〇番地)は現在、楽天記念大宮市立漫画会館となり、漫画に関するさまざまな資料が公開されている。

(関口安義)

北島新平 きたじま しんぺい 一九二六（大15） 童画家。

福島県会津に生まれ、一八歳の時長野県に移る。のち小・中学校で教鞭を執る。信州の児童文学同人誌「とうげの旗」の一員となり、挿絵を担当。その画風は、ふるさと会津と長く住んだ伊那谷の風景、生活を母体に、農民的なおおらかさとユーモアにあふれている。自作絵本『ごんごろう』ほか、挿絵担当作品が多数ある。一九八四年に作品集『ふるさと伊那谷童画の世界』が刊行された。

北島春信 きたじま はるのぶ 一九二七（昭2） 劇作家、

演劇教育研究者。熊本県砥用町に生まれ、熊本師範、法政大学卒業。一九五〇年から成城学園初等学校教諭として演劇教育を実践・研究。斎田喬に師事して『ひでり』『子どものまつり』など多くの学校劇脚本を書く。日本児童劇作の会副会長、日本児童演劇協会理事。著書『北島春信児童劇選』（一九六九）、『成城学校劇六十年』（七七）、『サクタロウの村ができた』（六九）など。

（生越嘉治）

北 彰介 きた しょうすけ 一九二六（昭1） 児童文

学作家、児童文化運動家。本名山田昭一。青森市に生まれ、一九四七年青森師範卒業。青森市内の中学校教員を経て、青森市の婦人青少年課長、市民図書館副館長を歴任し、八五年に退職。師範在学中より、口演童話に興味をもち、地方に根ざした文化活動に取り組ん

でいる。著書に『オモチャッコ』（一九七八）、『なんげえはなしっこしかへがな』（七九）などがある。

（鈴木喜代春）

北田薄氷 きただ うすらひ 一八七六—一九〇〇（明9）明33）

小説家。本名尊子。大阪に生まれ四歳で東京に移る。一八八二年神田坪内小学校入学。八九年東京府立第一高女に入学するが、母親の死去により退学。のち女子文芸学会に学ぶ。尾崎紅葉の門下となり「薄氷」の号で作品を書きはじめる。小説に『乳母』などがあり、一時樋口一葉につぐ作家と目されたこともあった。生前は単行本をもたず、死後『薄氷遺稿』（一九〇一）が編まれたにとどまる。全作品の三分の一が児童文学であるといわれるが、その最初は『白や！』（二八九五）で、以後九八年までに一一編を残した。発表はすべて『少年世界』である。九八年画家梶田半古と結婚、一子博兄をもうけたが一九〇〇年一月腸結核により死去。

『白や！』以外の作品は、いずれも少女あるいは少女を主人公としており、いわゆる『少女小説』の先駆的作品といわれるが、とくに『先生様々』（九八・五）にその趣が強い。

（藤本芳則）

北田卓史 きただ たくし 一九二二（大10） 童画家。

東京中野に生まれ、東京工業専修学校卒業後一九四二年ごろより一般挿絵を描く。戦後四七年ごろより小峰書店、ポプラ社などの児童図書に挿絵を描き、素朴な形

象表現と抑制された色彩による独自の世界が評価され「よいこのくに」の作品により小学館絵画賞を受賞。

主な作品として絵本に『ねじ』（一九八六）、単行本に『チョコレート戦争』（七三）、『くるまの色は空の色』（七七）ほか多数がある。

（久保雅男）

北畠八穂

（きただち）

一九〇三〜八二（明36〜昭57）小説家、児童文学作家。本名美代。青森市葭町に生まれる。

父慎一郎は官吏だったが、のち材木商を開業。母伊代。姉一人兄三人兄弟の末子として周囲の愛を受け、父方祖母からキリスト教の話を聞き、母方祖母からは津軽の民話を、また外国航路の機関長だった叔父からは外国の話を聞かされたという。北畠の作品には、こうした幼時体験の影響が随所に感じられる。経済的にも文化的にも恵まれた環境の中のびやかに成長し、青森女子師範附属小から青森高女を経て実践女子大学国文科へ進学したが、カリエスの発病で中退。このころから詩や小説の投稿をはじめ、「主婦之友」や「婦人倶楽部」などに入選。一九四五年一月「新潮」に『自在人』を発表し小説家として注目される。児童文学の執筆は、新潮社の児童雑誌『銀河』の創刊号（一九四六・一〇）に発表した『十二歳の半年』が最初。続いて翌年同誌に『ジローブーチン日記』を一年間連載。ともに戦争孤児が周囲の愛情と励ましを受けながら強く生きていく姿を描いている。自分の幼時体験を描いた『マ

コチン』（四八〜四九「光の友」）は、リズムカルな文体と快活な女児像が当時きわめて新鮮であった。児童文学で好評を受けるに従い、小説の執筆より児童文学の執筆が多くなり、『あくたれ童子ポコ』（五三）、『お山の童子と八人の赤ん坊』（五七）、『破れ穴から出発だ』（六三）、『鬼を飼うゴロ』（七一）、『2じょうまの3にん』（七二）、『高沢村の耳よし門太』（七三）、絵本『明りになったかたつむり』（七六）などを出版。北畠の作品の特色は、題名や人名のネーミングがユニークでユーモラスな会話と歯切れのよい文体で弾むように描いていることと、孤児や遺児など恵まれない境遇の子どもが周囲の大人から愛と知恵の大切さを学びとり、逆境を成長のバネとして明るくたくましく生きていく姿を社会的な背景の中で描いていることである。キリスト教的な人生観が基底となっている。

「鬼を飼うゴロ」うををか

長編童話。一九七一年実業之

日本社から出版。七二年サンケイ児童出版文化賞大賞、野間児童文芸賞受賞。ゴロの姉トミは知恵遅れだった。炭焼きと山菜取りでかろうじて生計をたてていた両親は娘を特殊学校に入れるためにゴロを海の学校に預けて出稼ぎにいく。やがて、工事現場の事故で父は亡くなり、旅館で働いていた母は再婚し、目の見えないおばばはトミ姉と一緒に精薄学園に引き取られていく。ひとりぼっちになったゴロは、耳の中に飼っている小

鬼を話し相手に、自分でなければできない生き方を一生懸命考えはじめた。どんな逆境からも強く立ちあがる子どものエネルギーを信じ生き生きと感動的に描いた作品。

(西田良子)

北原白秋

はくしゅう

一八八五—一九四二(明治十八—昭和十七)

詩人、歌人。本名隆吉。一月(戸籍上は二月)二十五日福岡県山門郡沖端村大字沖端町石場五五(現柳川市沖ノ端町)に生まれた。生家は代々高名な海産物問屋だったが、父の代から酒造業を主とし、古問屋、酒屋の屋号で知られた豪商だった。矢留小学校を経て県立中学伝習館に学び、三年生のころから詩歌書に親しむ。一六歳の時、大火に遭い家運衰退。このころ白秋の号を定める。一九歳早稲田大学英文科予科に入学、若山牧水を知る。二一歳与謝野鉄幹の新詩社に加入、「明星」の同人となる。その後『邪宗門』(一九〇九)、『思ひ出』(一一)により詩壇に揺るぎなき地位を得る。「スバル」「屋上庭園」「朱戀」を創刊、耽美派の芸術家の集会。パンの会の中心でもあった。続いての歌集『桐の花』(二三)は歌壇に新風を巻き起こしたが、人妻との恋愛事件、倒産による家族の生活問題などで、三浦三崎、小笠原島、市川真間と流転の貧窮生活が続く。しかしその間詩魂は枯れることなく、詩集としては『東京景物詩其他』(二三)、『真珠抄』(一四)、『白金之独楽』(二二)、『水墨集』(二三)、『海豹と雲』(二九)、『新頌』(四

〇)、歌集としては『雲母集』(一五)、『雀の卵』(二二)、『観想の秋』(二二)、『白南風』(三四)、『夢殿』(三九)、『黒松』(四〇)、民謡集としては『白秋小唄集』(一九)、『日本の笛』(二二)、『あしの葉』(二四)そのほか一〇巻に及ぶ著作がある。萩原朔太郎は「明治以来、日本は多くのすぐれた詩人を生んだけれども、その事業の広汎に渡り、韻文学の全野を開拓して、不世出の天才を発揮した詩人は、実に北原白秋氏の外にない」といつている。ところで白秋は、一九一八年(大七)七月「赤い鳥」の創刊に当たり、鈴木三重吉の懇意により、童謡の創作と応募童謡の選を引き受け、以来、死の直前までに、一二〇〇編を超す作品を残している。近代童謡の開拓者、建設者としてのその業績は偉大である。「赤い鳥」創刊に際し白秋は「新しい日本の童謡は根本を在来の日本の童謡に置く」といい「九歳以下の子供ぐらゐを標準にした」わらべ唄の現代化を志している。『とんぼの眼玉』(一九)、『兎の電報』(二二)、『まざあ・ぐうす』(二二)の時代である。それが総合雑誌『大観』(二三・二)に『叡智と感覚』という童謡論とともに発表された四五編を中心に編まれた『祭の笛』(二二)、『それに続く』『花咲爺さん』(二三)、『子供村』(二五)では、「詩を作り歌を成すと同じ心で、同じ態度で」といつている。間に異色の童謡集『二重虹』、『象の子』(以上二六)を挟んで、童謡論集『緑の触角』(二九)に続

く『月と胡桃』(二九)では、「わたくしの童謡が^{びび}齊しく
 童心童謡の歌謡として整へられてはあつても、その歌
 謡はいつとなく詩の一義へ進みつつあることを、わた
 くしは自ら否^{いな}みはしない」といつている。この間の童
 謡は以上九冊の童謡集のほかに、『白秋詩集第一巻』(二
 〇)、『白秋童謡集第一巻』(二四)、『からたちの花』(二
 六)、『日本新童謡集』(二七)、『作曲白秋童謡集』(二九)、
 『白秋全集第九―十一巻』(二九―三〇)、『白秋童謡読
 本第一ノ巻―第六ノ巻』(三一)、『まぶあぐうす』(三
 三)、『待ちぼうけ』(三三)、『全貌第宅輯―第八輯』(三
 三―四〇)、『白秋詩歌集V―VI』(四一)、『港の旗』(四
 二)、『朝ノ幼稚園』(四二)、『満洲地図』(四二)、『七つ
 の胡桃』(四二)、『風と笛』(四二)、『白秋丁』(四三)、
 『太陽と木銃』(四三)、『国引』(四三)、『大東亜戦争少
 国民詩集』(四三)としてまとめられている。戦後の編著
 書も多いが、^{*}與田準一編『からたちの花』(五七)、^{*}與田
 準一編『からたちの花がさいたよ』(六四)のほか、^{*}藤田
 圭雄編『日本児童文学大系7 北原白秋』(七七)は白秋
 の全童謡作品を一巻にまとめたものである。なお、一
 二〇〇編を超す白秋の童謡のうち、四〇〇編には曲が
 ついている。しかも一つの童謡に『あわて床屋』(石川
 養拙、^{*}山田耕筈、成田為三、^{*}杵屋佐吉)、『ちんちん千鳥』
 (近衛秀麿、成田為三、山田耕筈、宮原禎次、今川節、町田
 等)のように何人ものが作曲をしているので総数は六〇

〇を超す。主な作曲家は、山田耕筈(一一八曲)、^{*}中山晋
 平(九一曲)、成田為三(七九曲)、^{*}弘田龍太郎(六九曲)、
^{*}草川信(五五曲)、^{*}藤井清水(二五曲)。六〇〇曲のうち、
 今日歌い継がれているものの数は必ずしも多いとはい
 えないが、白秋の童謡を中心につくり出された童謡曲
 の伝統は、今日に生きる子どもたちの歌の核になっている。
 また『赤い鳥』誌上における白秋選の創作童謡の中か
 らは、^{*}與田準一、^{*}巽聖歌、^{*}佐藤義美をはじめとする逸
 材が育成され、『赤い鳥童謡集』(三〇)が生まれた。児
 童自由詩指導の本には『鑑賞指導・児童自由詩集成』
 (三三)、『児童詩の本』(四三)がある。創作の当初より
 収集に努めた地方童謡は白秋の死後、門下の人々の手
 で『日本伝承童謡集成』全六巻(七四―七六)として完成
 した。また、^{*}山本鼎、^{*}片上伸、^{*}岸辺福雄らと『芸術自
 由教育』(二二)を、^{*}山田耕筈と『詩と音楽』(二二)を、
 短歌雑誌としては『日光』(二三)、『多磨』(三五)を出
 している。三三年四月、鈴木三重吉と絶交、『赤い鳥』
 とも縁を切ったが、その後は『ゴドモノクニ』その他
 で活躍、死の直前まで童謡の筆は捨てなかった。童謡
 論集としては『緑の触角』のほか、『日本童謡物語』(三
 〇)がある。四一年芸術院会員に推され、城ヶ島に歌碑
 が建ったが、翌年一月二日病歿。多磨霊園に埋骨。
 八四年一二月生誕一〇〇年を記念して第一期二四巻・
 第二期一四巻の『白秋全集』が完成した。

『絵入童謡集』^{えいりどう} 白秋の童謡集には「絵入」とこ
とわったものがある。それは『とんぼの眼玉』(矢部季、
清水良雄、初出滋)、『兎の電報』(初山滋、矢部季)、『花
咲爺さん』(武井武雄、岡本帰一、清水良雄)、『子供の村』
(清水良雄、深沢省三、永瀬義郎、北原白秋)、『二重虹』(岡
本一平)、『象の子』(岡本帰一)で、幼児にうたいかけよ
うと意図した白秋童謡の出発点を示している。その他
『未刊童謡集』として『驢馬の耳』『赤いブイ』『光堂』
が、各巻に収録されている。

【参考文献】藪田義雄『評伝北原白秋』(一九七三 玉川大学出版
部)、藤田圭雄『日本童謡史』(一九八五 あかね書房)、佐藤通雅
『白秋の童謡』(一九七九 沖積舎) (藤田圭雄)

北村けんじ^{けんじ} 一九二九(昭四) 児童文
学作家。本名憲司、三重県に生まれ、旧制桑名中学を
卒業と同時に、小学校助教諭となり、その後、三重大
学を卒業。一九五三年ごろより児童文学に関心をもち、
児童文学者協会新人会に属す。のち、同会解散後、同
人誌『子どもと文学』を経て、中部童話サークルに参
加し、『中部児童文学会』の設立に加わる。初期時代には、
中部日本放送、NHKの児童向けドラマを書いた
こともあるが、六八年『小さな駅のむくれっ子』が毎
日新聞児童小説に入選したのをはじめ、『うりんこの
山』(一九六八)、『ハトと飛んだぼく』(七〇)を発表し、
児童文学の創作に力を注ぐ。海に生きる漁師と少年た

ちが巨鯨を追い求める、壮大なロマンを描き、サンケ
イ児童出版文化賞を受賞した『まぼろしの巨鯨シマ』
(七二)は、北村の代表作ともなる。その後、たくましく
生きる海女の姿を捉えた『トモカツギのいる海』(七
五)、『さよのいそ笛』(七六)、『小海女のふきちゃん』
(八二)など、海を舞台とした作品を発表する。また、一
方、時代とともに変わる山村の生活を描いた『ドンが
見た風の鳥』(七七)や、郷土色豊かな『ぼくがサムライ
になった日』(八三)、ほかに学校生活を描いた『坂道のある
学校』(七六)などがある。その作風は地味である
が、しつかりした構成、対象をみつめる目の厳しさと
優しさは、味わい深い。

北村季晴

すきはる

一八七二—一九三二(明五—昭六)

(鶴生美子)

音楽教育家、作曲家。東京に生まれ、東京音楽学校師
範部を卒業、青森師範、東京音楽学校などに教鞭を執
る。音楽教育家として『唱歌教科書』(一九〇二)などを
編むほか作曲活動も開始し、日本最初の創作オペラ『露
宮の夢』(〇五)を作詩・作曲・上演、以後叙事的唱歌
と名づけた劇的歌謡に力を入れた。宝塚少女歌劇創設
第一作として創作・上演された劇『ドンブラコ』(一四)
は、児童演劇史に画期を成した。一九〇九年に北村音
楽協会を設立、邦楽を五線譜に採譜するなど古楽保存
にも尽力した。

北村寿夫

ひさはる

一八九五—一九八二(明二八—昭五七)

(嶋田由美)

児童文学作家、劇作家、放送作家。本名寿雄。父は山口藩士の家に生まれ、明治維新後官途についた人で、神奈川県南足柄郡の郡長も務めた。寿夫は東京麹町で生まれ、五歳まで神戸、小学校時代は神奈川県松田に住み、一三歳で、一時大阪茨木市の親戚の養子となった。早稲田大学英文科を中退。木元平太郎のコードモ社の雑誌「童話」に「良友」に童話や童話劇を執筆。とくに、千葉省三が編集者を務めた一九二〇年四月創刊の「童話」には、小川未明とともに常連寄稿者となり、投稿童話・童話劇の選者も担当して活躍した。「童話」廃刊後、二八年に、千葉省三、酒井朝彦らと同人誌「童話文学」を出す。翌年には「童話文壇」への決別を宣言して、同人を離れる。それ以前、学生時代から演劇に関心をもち、小山内薫に師事して、二二年からは北村小松、北村喜八らと小山内宅での脚本研究会に参加、「劇と評論」誌の同人となつて、戯曲『幻の部屋』（一九二四）、「駒馬哲学」（二八）などを発表、新進劇作家としての評価を得た。三〇年には新潮社の『新興芸術派叢書』の一冊として『淡彩の処女』など小説も書いたが、その後は、戯曲、小説からも離れ、三六年から日本放送協会（J.O.A.K）文芸部主事となり、ラジオ放送の世界で活躍、『古城淡月の歌』（四二）、「北村寿夫放送劇脚本集」（四二）などを出版している。三五年から大阪中央放送局（J.O.B.K）で連続放送された童話劇『チョ

ビ助物語』は子どもの人気番組となり同名の単行本（三六）にもなった。戦時中は岡山県に疎開、農村演劇の指導に当たったりしたが、戦後はNHKの連続放送劇『向う三軒両隣り』の作者に加わり、五二年から単独執筆した『新諸国物語』は連続放送劇としてヒットし、主題歌の『笛吹童子』のメロディとともに一〇年間にわたって茶の間の人気を博した。それらの作品は作者によつて小説化され、『白鳥の騎士』『笛吹童子』『紅孔雀』『七つの誓い』『オテナの塔』として、さまざまな形で出版されている。五七年にNHKの放送文化賞を受賞。初期の童話集に『おもちゃ箱』（二四）、「蝶々のお手紙」（二五）の二冊がある。（富田博之）

キーツ エズラ ジャック Ezra Jack Keats 一九一六—八三 アメリカの絵本作家。ニューヨークの下町の貧しい家庭に生まれ、幼いころから絵を描き、遊び仲間に話をして聞かせた。代表作『ゆきのひ』（一九六二）は、町に大雪が降った翌朝、幼い黒人少年ピーターが一人で外に出て遊ぶ様子を淡々と描いたものが、色紙や模様紙のカラージュを中心にし、それに油彩やゴム印を併せて使うことによって、子どもの心の中の風景を象徴的に捉えることに成功している。それに続く『ピーターのくちぶえ』（六六）、「ピーターのいす」（六八）などにも、同じ主人公の日常生活の一コマがさりげなく描かれているが、背景となつてい

る下町がごみごみしてはいても子どもにとっては興味のつきない場所として表現されている点は注目に値する。『ピーターのめがね』(六九)など、あとの作品になるほど油彩が中心となり、色彩も暗くなる傾向がみられる。

(脇 明子)

狐物語

きつねものがたり

Roman de Renart 動物民話から

発し、一二世紀後半から一三世紀中葉にかけて北フランスで成立した韻文による寓話の物語群で、異なる作者の手による二八の枝編エピソードの総称。狐を主人公とする、動物社会を人間社会に見立て中世の現実を面白おかしく庶民精神で描いた物語。狡猾だが憎めない狐のルナールの策略と狼のイザングランの被る災難のエピソードが名高い。フォシエ、シヨーヴォー、ギヨなどによる優れた再話があり、児童文学の古典として読み継がれている。

(新倉朗子)

城戸幡太郎

きんたろう

一八九三—一九八五(明26) 昭和

60) 心理学者、教育学者。松山市に生まれる。東京大学卒業後ドイツに留学、心理学を修め帰国後法政大学教授、東大講師。『岩波講座・教育科学』二〇巻の刊行(一九三二)を機に、教育の科学的振興を叫び、一九三六年、教育科学研究会を興し会長として留岡清男とともに運動の中心となった。現実の教育問題を科学的に捉え研究する方向を打ち出した。児童文化、児童文学、児童学、保育問題を視野に収め理論と実践の交

流を図った。戦後国立教育研究所長、北海道教育大学学長を務めた。児童文化への関心が深く、文民協会を発展させた子ども文化研究所の理事長として活躍した。

(滑川道夫)

木下順二

きのした じゅんじ

一九一四—

(大3)

劇作家。

東京に生まれたが、父祖の地熊本へ移って中学・高校時代を過ごし、東京大学英文科に進んでからは、第二次大戦末期の信州疎開以外は、ずっと東京で暮らしている。少年期に東京と熊本の言語ギャップを体験したことが、言語に対する強い関心を育てた。熊本中学時代に斎藤勇の『英文学史』に感動し、英文学志望を固めたというが、大学では中野好夫のエリザベス朝演劇の研究の影響と、新築地劇団の後援会活動を通じて、的を演劇にしほらようになった。戦後は劇作の一方で、長い間明治大学演劇科教授であったが、のち創作活動に専念し今日に至っている。木下順二の劇作は、『風浪』(一九四七)、『山脈』(四九)、『東の国にて』(六二)などの日本近代の曙を題材にした歴史劇の系列、『蛙昇天』(五一)、『オットーと呼ばれる日本人』(六三)、『神と人のあいだ』(七二)のような現代劇の系列、『雨と血と花と』(六〇)、『口笛が、冬の空に』(六二)などの放送劇の領域にわたっていて、現代日本の社会問題とその扱ってきたところと取り組んだもので一貫しているが、いわゆる民話劇もそれと問題意識においてはずな

がつている。木下の創作で児童文学と深くかわるものは、『夕鶴』（四九）、『彦市ばなし』（四七）、『三年寝太郎』（四七）などの民話劇であるが、これは、ヨーロッパ人が共通の古典遺産としてもつギリシア神話のようなものが、日本人にはついに所有できないか、民話はそのに倣（なら）ひしないかの試みである。各地の方言のことばとしての魅力を借り、混合方言によって、共通語の弱体を活性化する努力も、こゝでなされている。木下は民話劇を単なる再話にとどまらない再創造、祖先との共業をめざすものとしており、子どもたちのために書き下ろした『日本民話選』（五八）なども、昔話を貫く民族の心の再発掘をめざしている。ことばの力、面白さで子どもたちの心を打とうというねらいも、それと一連のことであろう。

（益田勝実）

木下左太郎 きしたさだろう 一八八五—一九四五（明18）昭和20）詩人、劇作家、医学者。本名太田正雄。静岡県伊東生まれ。東京大学医学部卒。詩集『食後の唄』（一九一九）、戯曲集『和泉屋染物店』（二二）のほか、多くの評論・随筆集がある。一九二〇年中国旅行後、伝説に心を動かされ、清代の怪談集『新齋諧』から少年向きの怪談を『少年世界文学』のために翻訳し、『支那伝説集』（二二）として刊行。『母狼に化す』『人に化けた虎の話』『死人が冤罪を訴へに来た話』『魂を蔵（くら）へて置く瓶のこと』『吝嗇（きんせく）な梨商人』『七人の盗賊の話』など、子

どもを魅了する怪談が満載されている。（増子正二）

キーピング チャールズ Charles Keeping 一九二四—イギリスの画家。サトクリフなどの挿絵で認められ、絵本作家に転じる。自作の絵本には、生まれ育ったロンドンの下町の情景を描いたものが多く、絵としての質は高いが、ストーリー性に乏しいとの批判もある。しかし、代表作『まどのむこう』（一九七〇）では、子どもたちの目に映る情景だけから、その子どもたちの内面を、無意識の領域まで含めてリアルに捉えることに成功している。

（脇 明子）

儀府成一 ぎふ せいいち 一九〇九—（明42—）作家、評論家。本名藤本光孝。岩手県御所村生まれ。儀府の筆名は、一九三四年四月から使用、それ以前は、母木光を名のる。若いころ詩を書き、『岩手詩集』第一集（一九三三）を編集。それが縁で、宮沢賢治と親交があった。著書に、『人間宮澤賢治』（七一）、『宮沢賢治—その愛と性』（七二）、童話集『河馬の名刺』（三九）、長編童話『雪いろのペガサス』（七四）などがある。

（宮川健郎）

キプリング ラジャード Rudyard Kipling 一八六五—一九三六 イギリスの詩人、小説家。インドのボンベイに生まれ、イギリス本国で教育を受ける。一八歳でインドに渡り、六年間記者として、インドの人々や、当時のイギリス植民地インドに君臨したイギリス人の軍人・官吏の世界を見る経験をする。のちの『インド

もの「や子どもの本として名声を博した『ジャングル・ブック』(一八九四、九五)、『キム』(一九〇一)の背景を構成する六年であつた。多様な世界を描く短編小説・スケッチに示される鋭い観察眼と、ジャーナリストとして身につけた無駄のない文体に作家としての優れた資質をみるが、キプリングが抱いた一つの強固な秩序への考え方が最もよく表されているのは、狼少年モーグリを主人公とする八編とほかにマンガースを描いたリッキ・ティッキ・ターヴィの話から構成される『ジャングル・ブック』二巻であろう。動物世界の完全な、そして論理的な調和の理想像が描かれているといえよう。これらの作品は、インドを舞台に、自然と文明の意味をキプリングなりに問いかけていて、その現代的意義を評価するむきもある。虎のシアカン、豹のバギーラ、狼のバンターログ、そして老熊バルー、狼のアケーラとモーグリを囲む動物たちの言動は若い読者の想像力を刺激する力を失わないものであるが、動物物語として位置づけるより、のちのオーウェルの『動物農場』の寓話世界に通じるメッセージを含んだ作品として評価しよう。『Stalky & Co. ストーカーとその仲間』(一八九九)はキプリングの若いころの学校生活を背景とした学校物語であるが、タウンゼンドの指摘にあるように、現代の子どもの本棚に生き残る力を失っている。児童文学の観点では、サトクリフに継承されている意

味で、イギリスの過去の歴史的挿話を、キプリングの想像世界の中に豊かに再構成し、技巧的にもタイム・シフトといえる導入を用いたファンタジー『Puck of Pook's Hill プックが丘のバック』(一九〇六)と、その続編『Rewards and Fairies ほううびと妖精』(一〇)が優れている。さらに伝説神話的素材を取り入れ、語りの軽妙さも手伝って、ナンセンスの伝統を大いに示している『なぜなぜ物語』(一二)は、キプリングの終生失わなかった子ども心への傾倒をうかがわせる好例といえる。キプリングの筆は子どもの世界に常住する硬質のユーモア感覚を十分に行間に満たしていて、読む本として以上に、読み・語り聞かせる本として現代においてもその魅力を保っている。キプリングの子ども本の著者としての一つの姿がこの面に示されているといえよう。一九世紀の末期から二〇世紀の初頭に開花したイギリスの子どもの本の世界にあって、大人の読者を数多くもちながら文学世界での評価においては不遇であつたキプリングであるが、子どもの本に関しては、才能をもつ栄光の作家の一人である。

『ジャングル・ブック』The Jungle Book, The Second Jungle Book 正(一八九四)と続(九五)の二冊よりなる。計一五編の短編集。そのうち八編がいわゆる「狼少年モーグリ」の物語。インドのジャングルで母狼が人間の赤子を、虎のシアカンの襲撃から救助し、

モーグリと名づけて育てる。モーグリはジャングルのきびしい生活を体験する。他の『象のトーマイ』ほか六編はモーグリの話とは別だが、いずれもジャングルの動物や隠者のドラマに富む物語である。（高桑啓介）

木俣 修 おきむ 一九〇六（八三）（明39）昭和58）歌人、

国文学者。本名修二。滋賀県生まれ。東京高師卒。『赤い鳥』に投稿、童謡九編が入選している。*北原白秋に師事し、歌人として、また短歌の研究者として優れた業績を収めた。白秋の企画した『日本伝承童謡集成』の編集に当たるとともに、白秋に関する研究にも力を注いだ。『白秋研究』（一九五四～五五）、『わらべ唄歳時記』（五七）のほか、『高志』（四二）、『冬暦』（四八）、『落葉の章』（五五）などの歌集、『近代短歌の諸問題』（五六）など短歌研究書多数。文学博士。昭和女子大学教授、実践女子大学教授を務めた。

（畑中圭二）

木俣 武 たけし 一九〇八（七五）（明41）昭和50）童画

家。小諸市に生まれ、『ゴドモノクニ』に投稿。*武井武雄の指導を受け一九三五年より同誌のほか絵雑誌、絵本に執筆。メカニックな単純化された人物、乗り物の表現はユニークであり、教科書などにも執筆したが、絵本『のりものシリーズ』などが代表作。四七年ごろより色セロファンを利用したの幻灯影絵「かみきりむしの会」を主宰指導。歿年まで現埼玉短大ほかで講師。第一回児童文化賞も受賞（一九四〇）。

（久保雅勇）

君島久子 きみしま ひさこ 一九二五（大14）民族学

者、中国文学者。栃木県に生まれる。慶応大学卒業、東京都立大学大学院修了。武蔵大学教授を経て、現在国立民族学博物館教授。中国児童文学研究会を主宰し、研究誌『中国児童文学』を発行する。訳書『西遊記』（一九七五）で日本翻訳文化賞、『白いりゅう黒いりゅう』（六四）、『中国の神話』（八三）で、ともにサンケイ児童出版文化賞を受賞し、中国の児童文学を日本に広く紹介した功績は大きい。（中島久美子）

金素雲 ソウモン 召全 きん 一九〇八（八一）朝鮮の詩

人、児童文学者、随筆家。本名は金教煥、一時は鐵甚平のペンネームも使う。一九二〇年に来日、東京・開成中学校中退。このころから白鳥省吾主宰の『地上楽園』の同人に加わり朝鮮農民歌謡の採集に努め翻訳紹介するカタワラ『諺文朝鮮口伝民謡集』を著す。また*北原白秋に師事し、『朝鮮民謡選』『朝鮮童謡選』『朝鮮詩選』などを編訳した。三三年に『朝鮮児童教育会』を設立、『児童世界』『新児童』誌を発刊、三六年には朝鮮総督府学務部の支援のもとに朝鮮学童の課外雑誌『木馬』を主宰する。この前後、童話集『石の鐘』『青い葉っぱ』『黄色い牛と黒い牛』、史話『三韓昔がたり』『朝鮮史譚』などを著した。五二年から六五年まで日本に滞在、朝鮮民話『ネギをうえた人』（五三）、随筆『恩讐三十年』『アジアの四等船客』などを著し、帰国後に

は『韓国文学選集』全五巻の編訳、『精解韓日辞典』の編修、自伝的随筆『天の涯に生くるとも』など執筆活動は多面にわたった。

(李丞玉)

金 燿 燮

キム ヨンフ

김요섭

一九二六

韓国

の詩人、児

童文学作家。

咸北会寧出身。

一九四一年一五歳で童話

『峠の向うの先生』が新聞社の新春文芸に入選し注目

された。その後多くの作品を発表、六六年に第一回小

泉文学賞を受賞した。戦争の悲惨さと抵抗を描きなが

らも美意識を生み出している。少年小説『暖い夜』(一

九五七)、『はるかな国よ』(五九)、童話集『深い夜星が

鳴らす鐘』(五七)、『ばら劇場』(六二)など多数。

(田坂常和)

金 英 一

キム ヨンイル

김영일

一九一四

韓国

の童

謡詩人、童話作家。日本大学芸術科卒。韓国児童文学

会会長。新聞、雑誌での童謡の入選を契機に創作活動

を開始し、東京時代に児童雑誌を創刊した。帰国後、

児童劇団や児童雑誌の編集にかかわりながら活動。一

九五〇年に初の児童詩集『リス』を発刊して自由詩論

を發展させ、斬新な詩風を確立した。また童話では庶

民的な子どもの世界を描き、会話中心の展開と性格描

写が特徴的である。大韓民国児童文学賞、李周洪児童

文学賞(夢をつくる子どもたち)を受賞。

(仲村 修)

木 村 小 舟

キムラ しょうしゆ

키무라

しょうしゆ

木村小舟

一九〇六

七六

(明治三十九)

昭和五十一)

小

木村不二男

キムラ ふじお

木村不二男

一九〇六

七六

(明治三十九)

昭和五十一)

小

木村不二男

キムラ ふじお

木村不二男

一九〇六

七六

(明治三十九)

昭和五十一)

小

木村不二男

キムラ ふじお

木村不二男

一九〇六

七六

(明治三十九)

昭和五十一)

小

説家、童謡詩人。秋田県生まれ、父文助とともに北海道に移住。函館師範、文化学院を経て玉川大学卒業。小学校教師として綴方教育運動に参加、童謡詩人としても「赤い鳥」に投稿。一九四一年小説「古譚の歌」が中央公論新人賞を受賞。四五年北海道に帰り小説・評論を発表。教育関係では『綴方の書』(一九三八)、『母の綴方』(四〇、父文助と共著がある。日本童話会の「童話」に評論『鈴木三重吉』を五七回にわたって連載しライフワークとなった。童謡集『シバの祭』(五八)もある。

キメニエ バーバラ Barbara Kimenye (加藤多一)

ウガンダの物語作家、ジャーナリスト。職歴や年齢は重要でないとして明らかにしていない。『Moses モーゼズ』(一九六七)、『Moses and the Ghost モーゼズと幽霊』(七一)、『Moses and the Penpal モーゼズとペンフレンド』(七三)など、モーゼズ少年を主人公にした一連の冒険読み物および学園ものなどを書いて東・西アフリカの読者に人気を博している。昔話や動物ものではなく、現代のアフリカの子どもの世界を描いて成功している数少ない作家の一人である。(さくま ゆみこ)

木元平太郎 へいたろう 一八六五—一九四二(慶応一)昭

17) 画家、出版者。とくに絵雑誌編集者として優れた業績を残した。大分県出身。東京美術学校師範科を卒業、独協中学などに教鞭を執り、図画教育家としての

経歴を雑誌づくりに生かした。大阪で出された「お伽絵解き」*から示唆を得て、一九〇五年に「家庭教育・絵ばなし」*を創刊し、大正期に設立したコードモ社から絵雑誌「コードモ」*を、ついで小学生向けの「良友」と「童話」*を発行した。コードモ社の社員や協力者に、画家の田中良、川上四郎、作家の浜田廣介、千葉省三また高島平三郎などを擁していた。(アン・ヘリング)

キャメロン エリナー Eleanor Cameron 一九二二

アメリカの作家。カナダで生まれ、アメリカで児童図書館員をつとめつつ創作に入る。『The Wonderful Flight to the Mushroom Planet きのこ惑星への不思議な旅』(一九五四)にはじまる「きのこ惑星」シリーズのSFのほか、両親のことで悩む少女の精神的成長をリアルに描いた『A Room Made of Windows 窓でできた部屋』(七一)や過去の世界に少年が引き込まれるファンタジー『Beyond Silence 沈黙の彼方』(八〇)や優れた児童文学論集『The Green and Burning Tree 緑にもえる樹』(六九)などがある。(杉山洋子)

ギャリコ ポール Paul Gallico 一八九七—一九七

六 一四年のスポーツ記者生活を基盤に、幅広く多方面に才能を示したアメリカの作家。現代という時代を卓越した力で見抜き、愛の物語をさまざまにつづった。『白雁』(一九四一)発表以来名声が高まり、『さすらいのジェニー』(五〇)、『雪のひとひら』(五三)、『七つの

人形の恋』(五四)、『まぼろしのトマシーナ』(五七)、『トンデモネズミ大活躍』(六八)などきらめく愛の滴を描き続けた。

(島 式子)

キヤロル ルイス Lewis Carroll 一八三二—一九八
イギリスの児童文学作家、大学教師。本名チャールズ・ラトウィッジ・ドジソン。英国国教会の聖職者を父に、子だくさんの家の長男としてチェシャーに生まれた。早くも十四歳の時のちの作品を特徴づける滑稽やパロディ^{*}がすでに顔をみせている『*Useful and Instructive Poetry* 有益で教訓的な詩』を書き、またオックスフォード大学入学前に書いた『*The Rectory Umbrella* 牧師館の雨傘』にも滑稽な文章の書き手としての才能がよく現れている。一八五一年オックスフォード大学クライスト・チャーチ・カレッジに入学し、翌年独自の聖職者になれば、一生この学寮で過ごすことのできる資格を得た。数学の才能を買われ、五五年には正式に数学の講師に任じられ以後その生涯の大部分をオックスフォードで過ごしたが、正式の聖職者にはなることなく終わった。まじめな教師ではあったが、吃りのせいもあってか、学生の人気はなかったという。教職の合間には読書にふけり、芝居見物、滑稽詩や散文の執筆をし、さまざまな発明をしたりして楽しんだが、一番熱心にやったのは折から流行しはじめていた写真で、多くの作品を残しイギリスの写真界の先駆者

の一人に数えられている。

吃りと内向的な性質のせいでも人づきあいに困難を感じていたドジソンにとつて、子どもとの交際ほど心の休まる楽しいことはなかった。学寮長リッデルの子どもたちと知り会ったのは、五六年三女アリスが四歳の時であった。やがてキヤロルの名を不朽のものにした『ふしぎの国のアリス』のもとになった物語は、六二年リッデル家のむすめたちを連れて川遊びに出かけた折、聞かせたものだった。アリスの頼みで物語を書き下ろしたドジソンは、作家マクドナルドの勧めによつて、^{*}テニエルの挿絵をつけ六五年出版にふみきった。かくして内気なドジソンはことばの魔術師キヤロルに変身し、その物語は聖書とシェークスピアについて多く引用されるようになった。出版後間もなく「ペルメル・ガゼット」誌は、「この楽しい小さな本は子どもたちの祝宴、ナンセンスの勝利だ」と好意的な書評を掲載した。このことから当時の児童文学の潮流が教訓から楽しみの追求へと変化しつつあったことがうかがわれる。六七年続編『鏡の国のアリス』に着手(完成出版は一八七一年)、またのちに『シルビーとブルーノ』の母体となった『ブルーノの復讐』をギャティ夫人の「ジュディおばさんの雑誌」に寄稿した。最後のナンセンスの傑作詩集『スナーク狩り』(一八六九)のあとうって変わって教訓臭の強い『シルビーとブルーノ』

(八九)、『*Stilve and Bruno Concluded* シルビーとブルーノ続編』(九三)を書き、ナンセンズの輝く勝利であった二つのアリスや『スナーク狩り』に比べて、「英文学史上もつとも興味ある失敗作」と評されているが、キヤロルの内部に存在し、その現実での生活を常に統制していた強固な保守性ははしくも露呈したにすぎない。五八年以後、本業の数学と論理学の仕事も多くなっているが、七〇年代末になると、数学や倫理学、言語を遊戯化する傾向をみせはじめ、多くのゲームを考案した。生涯独身を通し、九八年一月ギルフォードで死去。

キヤロルの功績は伝統的な妖精物語とは異なり、一九世紀の子どもの現実を踏まえて、独創的なファンタジーをつくり出したところにある。当時の子どもたちにとっては身近なゲームだったランプやチェスが生命を与えられて、不思議の国や鏡の国の住人として登場し、現実世界では体験不可能な不思議を現出する。

ウィクトリア朝の典型的な少女アリスは、現実では通用しない奇妙な論理をふりかざす住人たちや彼女の常識が受けつけない途方もないでき事を二つの世界で体験し、もみくちゃにされる。キヤロルは、常識や論理の転倒と言語の解体、「艶語」と呼ばれる新たな言語の合成などによってナンセンズの論理の浸透した非現実の世界を構築したのである。キヤロルが現れるまでの

イギリスの子どもの本は、その大方が教訓的なものであった。キヤロルは清教徒的精神風土の中で長い間抑圧されていた想像力と空想力とを解放し、ファンタスティックなでき事や、ナンセンズの論理で子どもたちをひたすら楽しませることに成功した。かくしてキヤロルは教訓に奉仕せず、楽しみを与えることに専念する近代の児童文学の先駆者とみなされるようになり、以後児童文学は教訓主義のくびきを脱したのである。

キヤロルの成功は多くの作家たちに刺激を与え、以後模倣者が数多く現れたが、彼らのほとんどは失敗しキヤロルを超える者は多く出なかった。それはキヤロルの作品のように厳密な論理で構築された「他の国」としてのファンタジーの世界を創造することがもともときわめて困難であるためもあるが、やがて時代の現実重視の精神がネズビットに代表されるように、現実の中に魔法をもち込む物語を生む傾向をみせるようになったことも無関係ではない。時がたつにつれて、アリスの物語は子どもばかりか大人の関心をますます強く引きはじめた。すでにウィクトリア朝において、子ども同様にこの物語を愛した「どの紳士のライブラリーも『アリス』なしには完全なものにはなりえない」という状況が生じていた。キヤロル自身は否定しているのだが、大人はこの物語を寓話か風刺的作品として受け取ったのである。『アリス』の中に隠れている意味

を探ろうとする傾向はさらに進み、二〇世紀に入ると学者たちの発言が活発化した。文学をはじめ、フロイトやユングの精神分析的見地からの分析に加えて、言語学、哲学、論理学などからのアプローチも数多い。それはキヤロルの描き出した不条理な世界のありようが、解体されつつある二〇世紀の現実と奇妙な暗合をみせているかに思われて人々の興味を引くからであろう。

『ふしぎの国のアリス』^{ふしぎのくに} Alice's Adventures in Wonderland ナンセン・ファンタジー。一八六五年。一〇歳のアリス・リッデルにせがまれて遠足の途中でした話を後に書き下ろし、挿絵をつけ、『アリスの地下の冒険』として一八六四年のクリスマスプレゼントにした本をもとに『プタとコシヨウ』『氣ちがいのお茶の会』などの章を加え、登場人物も多少変更して出版したものである。キヤロルは作家マクドナルドの息子が、「こういう本ならもう六万冊読みたい」といったことに力を得て出版に踏み切ったという。白ウサギのあとを追いかけて穴に落ちたアリスは、ナンセンの論理の支配する国で、次々に不思議な住人やでき事に出会いはじめはとまどいが、そのうち理不尽な裁判をする王や女王が「たかがトラップの札に過ぎない」ことを喝破して目を覚ます。キヤロルは物語を夢の枠に入れることで常識的な大人からの批判をそらし、同

時に現実の中に束縛されていた子どもたちをナンセンによって解放するという離れ技をみせたのである。

『鏡の国のアリス』^{かがみのくに} Through the Looking-Glass, and What Alice Found There ナンセン・ファンタジー。一八七一年。キヤロルは『ふしぎの国のアリス』を出版してから一年半ほどして続編の出版を意図したが、原稿の完成は大幅に遅れた。この物語はチェスのゲームを骨格にして、鏡の向こうの世界に入ってしまったアリスが白の女王の歩になったのを振り出しに、途中でさまざまな奇妙な登場人物に出会いながら、まず目を進み最後に赤の女王を捕まえてゲームに勝ったとたんに目を覚ますまでの不思議な冒険を語ったものである。「ジャバオッキイ」や「海象と大工のうた」のようなナンセン・バース、ハンプティ・ダンプティとのかぼの働きについての問答、赤の王様の夢をめぐってツイードルダムとツイードルディと交わす会話など、英国人が好んで引用する部分は前作よりもこの作品の方に多く見いだされる。ナンセンは依然健在であるが、名なしの森で仔鹿に出会う場面や白の騎士との会話にうかがわれるように、感傷的な色あいが濃く現れていて作者の内面的変化を示している。

【参考文献】ハドスン『ルイス・キヤロルの生涯』（高山宏訳、一九七六 東京図書）、ジャン・ガッテニヨ『ルイス・キヤロル』（小

池三子男訳、一九八五 創林社、高橋康也『ノンセンス大全』(一九七七 晶文社) (猪熊葉子)

休暇物語のきゆうものがたり

アフリカが未知の大陸でなく

り、エベレストは登頂され、アマゾンの奥地を人が踏

破した現代にあって、冒険は、冒険物語の中にしかな

くなりつつある。マーク・トウェインの『トム・ソー

ヤーの冒険』(一八七六)のトムは、冒険物語を愛読して

おり、冒険ごっこから、冒険へと導かれていく。人間の

冒険を求める精神は「冒険ごっこ」をするという新

しいジャンルを拓いてきた。期限つきの冒険を休暇を

使ってやるという設定である。イギリス児童文学では

学校という必要悪が終わったところから物語がはじ

まっている作品が数多くみられる。三組の子どもたち

が休暇中に行うさまざまな冒険を一二冊のシリーズに

仕立てあげたのはランサムである。ジャーナリストと

してロシアを旅した後、湖水地方に腰を落ちつけ、船

と魚釣りに専念するかたわら、第一作『ツバメ号とア

マゾン号』(一九三〇)を書いた。休暇を湖上でヨットを

操って過ごすウォーカー家の四人の子どもと、ブラ

ケット姉妹の活躍は、船の構造、操縦法、食事のメ

ニューと細部に詳しく、実際に帆船に乗って湖の島で

キャンプする気分をかきたててくれる。チャーチの『地

下の洞穴の冒険』(五〇)は、五人の冒険クラブの少年に

よる考古学上の発見の物語である。日本でも、一九六

〇年代以後、休暇物語の要素をもつ作品が出版される
ようになるが、学校という鎖を断ち切ることが難しく、
完全に子ども遊びの世界として描き切れない。中では、
たかしよいちの『竜のいる島』(七六)がスケールの
大きき、古生物学の謎解き、海の魅力を合わせ語って
いて成功作といえよう。また、オーストラリアのサウ
スオールが一貫して書いた危機物語は休暇中に潜む落
とし穴(『ヒルズ・エンド』(六二)では局地台風、『燃える
アッシュ・ロード』(六六)では山火事)にはまり込んだ新
しい型の冒険物語となった。(三宅興子)

ギユット ポール Paul Guth 一九一〇ー フラン

スの小説家、児童文学作家。スペインとの国境オート・

ピレネー県生まれ。フランスの最高学府、高等師範学

校卒。各地のリセの教員を経て文筆生活に入り、『素朴』

とあだ名された主人公の連作小説で有名になる。児童

文学には、『ムステイク(蚊というあだ名の少年を主人

公とした三部作がある。『ムステイクと砂売り小父さ

ん』(二九五八)、『ムステイクと青ひげ』(五九)、『ムス

ティク月へいく』(六〇)。いずれも、フランスの作品ら

(塚原亮二)

ギェルネ René Guille 一九〇〇ー六九 フラン

スの児童文学作家。西フランスのサントンジュに生ま

れる。ボルドー大学卒後、当時の仏領西アフリカのダ

カール(現セネガル共和国の首都)のリセに数学教師と

して赴任。第二次大戦に志願兵として参加した期間を除いて二五年間をアフリカで過ごした。その間、西および中央アフリカ各地を探検旅行し、アフリカへの愛情と知識を深めた。一九四五年、終戦によりアフリカに戻つてのち、小説を書きはじめ、冒険小説大賞、植民地文学大賞を受賞。五〇年に、帰仏し、パリのリセ・コンドルセに勤務。児童文学の第一作は、アフリカ滞在中の四八年に『*Au pays des bêtes sauvages* 野獣たちの国で』を発表。以後、四〇冊に及ぶ作品集を世に送った。六四年度、国際アンデルセン賞の大賞を受賞。動物を題材にした作品が多く、フランス動物児童文学の第一人者である彼は、(1)アフリカのジャングル、(2)シベリアのツンドラ地帯の動物を描く。とくに(1)の作品が多く、代表作は、『象の王子・サマ』(一九五〇)、『めすライオン・シルガ』(五〇)、『豹のクポー』(五五)、(2)の代表作は『グリュシユカと熊』(五八)、『*Grichka et les loups* グリュシユカと狼』。以上の作品では、太古のままの自然の中に野獣が登場し、人間と野獣、文明と自然が対比して描かれ、前者を「悪」、後者を「善」とみている。文明批判をテーマにした動物文学である。アフリカを舞台に取りながら抑圧された植民地の民衆の姿が描かれなないのは彼らを自然の中に含ませているのであろう。動物文学以外の作品も多く、アフリカを扱った幻想的な異色作『一角獣の伝説』、『*L'Etranger*

du port 港の異邦人』、『*Trois filles et un secret* 三人の少女と一つの秘密』、幼年向けの小犬を主人公とするシリーズなど冒険小説、少女小説、幼年文学、科学読み物と幅広い。それらの作品のすべてが帰仏後の一九年間に集中している。六五年には、年間に七冊を世に送っている。

「グリュシユカと熊」グリセーシュ・カビュマ *Grichka et son ours*

動物物語。一九五八年刊。雪に覆われたシベリアが舞台。おそらく、想像によって描かれた自然であろう。

主人公のグリュシユカと熊の子ジディとは親から離れた同じ身の上である。両者は理解し合い深い友情で結ばれる。純粋な人間は社会から疎外される。その人間を理解するのは同じく純粋な心をもつ動物である。

美しい自然を背景に繰り広げられる人間と動物の愛情物語——それを通しての文明批判の作品。(塚原亮二)

教育読み物きょういぶつ 一八世紀後半から一九世紀半

ばにかけての欧米で、子どもたちのモラルや知識の教育を目的とした読み物が数多く出された。その初期の中心はフランスのベルカンの出した児童読み物のシリーズ『*L'ami des enfants* 子どもの友』であり、その後この教訓主義を土台にした流れは、イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国やアメリカにも及んだ。イギリスにおけるトリマー夫人の「教育の守り手」などの雑誌もその一つだが、こうした教育読み物に共通す

る特徴として、モラル・コントラストと完璧な親とがある。さまざまな形の善と悪との対比と、最終的に確固たるモラルを子どもたちに提示する親または、それに近い大人がいるという構図があるのである。また、この系譜の物語は、実用性の観点から昔話を排斥しようとしたことも一つの特徴である。昔話のような荒唐無稽なものは、子どもたちには有害なものだとする一方、同じ観点から、貧しい子どもの立身出世物語とも結びついていった。我が国では、三輪弘忠の『少年之玉』(一八九〇)が、欧米のそれとよく似た内容をもつ作品であり、昭和期における佐藤紅緑の『あゝ玉杯に花うけて』(一九二八)なども、同じ基盤に立つ作品だといえるが、欧米のそれらと関係があったのか、なかったのかは、今のところよくはわからない。(安藤美紀夫)

狂言 げん 元来は常軌を逸した冗談の意味の「狂言綺語」の一方向が、猿楽から出て独立した演劇に発達したのは、南北朝時代の一四世紀のころである。後の文楽や歌舞伎でも演目を狂言と呼ぶから、区別する必要がある。狂言は能と相前後して発達し、能とともに上演することが多いが、仮面や謡を用いず、口語で演じられる点が多くなる。大蔵・鷲・和泉の三流のうち、明治になって鷲流が衰え、現在は残る二流が栄えている。その原形を示唆する三番叟の『翁』のよな祝儀狂言と、能の中に挿入されて演じられる間狂

言と、独立した狂言とがあるが、最後の独立した狂言は喜劇的演劇で、笑いの要素が渦巻く珍しい形に結晶した。詞章の文字への固定が遅くて文字の文学への影響が弱く、子どもの観劇の機会も少なく、児童文学・児童演劇との結びつきが弱かったが、太郎冠者・次郎冠者のような愉快な造型をはじめ、今後児童劇・ミュージカルに生かすべき要素に満ちている。(益田勝美)

姜孝淳 きやうじゆん → カンヒヨスン

姜小泉 きやうせうせん → カンソーチョン

兄弟 きやうだい → けいてい

行智 ぎやうち

* 京藁兵衛 きやうぼうゑ 一八六七〜歿年不詳(慶応3〜?)

巖谷小波系の戯作者。本名堀野与七。京の童をもじつた別号。小波洋行中「少年世界」の編集に従事し、同

誌および博文館の児童誌に執筆。黒田湖山、武田桜桃、竹貫佳水、磯澤水らと活躍した。与七は京橋紅屋の主人で、出版社文禄堂を創立して、自著や文芸書を出版した。滝沢馬琴の『童蒙話赤本事始』をもとに『訂正日本五大噺』『滑稽五大噺』のほか『少年世界』に『同山会』『今桃太郎』などを執筆している。（滑川道夫）

教養小説（きようせうせつ） 近代小説の一つのジャンルで、主人公の性格や思想が、人との出会いや境遇によって発展、好ましい人間的成長を遂げていく物語のたぐいで『成長小説』に近い語義で用いられる。ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』、山本有三の『路傍の石』などはその代表的作品。読者の好ましい人間成長を願って書かれたということでは功利的文学といえるが、滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』が儒教倫理を、また小林多喜二の『蟹工船』が革命思想の普及を意図していることなどと比べると、イデオロギーに捕らわれない人間性そのものの豊かさ、人格の完成を願うという点に特徴があるかにみえる。しかし子細にみると『路傍の石』にせよ下村湖人の『次郎物語』にせよ、その主人公の人格完成の途上には、常に前近代的な權威や人間関係との相克があり、その意味では単なる個人的人格主義の文学というより、前近代的体制と対決して、真の近代自我の確立をめざす文学といえる。また児童文学は本来向日性の文学といわれるところから、主人公が少

年である時は、ほとんどが教養小説の傾向を有しているといえるであらう。もつとも戦後民主主義が定着した一九六〇年代以後の作品、たとえば関英雄の『小さな心の旅』や福田清人の『春の目玉』などになると主人公の自我も弱まり社会との対決も希薄となってきたが、それだけヒーロー的虚構よりも自伝的要素が前面に出てきたということである。（浜野卓也）

巨人（きょじん） ジャイアント。巨大な体軀をした怪力の超自然の生きもの。淵源および系譜は、(1) 巨大な自然の力を象徴的な擬人化や、山・湖・谷の由来——イギリスのコーンウォール地方には、巨人が日光に撃たれて化石になった岩山、巨人が石投げや積木遊びをした岩石の谷の伝説があり、シュロップシャーのレーキン山は、巨人がシャベルで土盛りしたといわれる。相模の大沼は、ダイダラボッチが富士山を背負おうとして踏み込んだ跡など。(2) 神話伝説の神々——ギリシア神話の宇宙生成に携わった大地女神ガイアや天の神ウラノス、そこから生まれた巨人族キュクロプス（二つ目巨人）やヘカトンケイル（百手巨人）。北欧神話では、天地創造の大きな裂け目ギンヌンガから生まれた最初の生物はユミルという名の巨人で、脇の下から人間の男女、足から霜の巨人が生まれる。日本の天地創造神話のイザナギとイザナミも、天から下ろす逆錐のしたたりで国をつくり、国引きをする巨人神である。(3) 先住

民族への恐怖——先史時代の巨石群（ストーンヘンジなど）、砦などの石造建築、サセックスのウィルミントンにある大男の絵姿、ドーセットのサーン・アバスの巨人像、アフィングトン丘中腹の巨大白馬像などは、巨人だった先住民族の作といわれる。(4)伝説の英雄——ヘラクレス、フィン・マクール、アーサー王、弁慶など、優れた人物が伝説伝播の過程で想像力の中で誇張され理想化される。(5)鬼や怪物への恐怖が生む魔術で身体が大きくなった巨人も含む——アラジンのランプから現れる巨人召使い。日本の狸の化ける見越し入道、手洗鬼、天柱を立てる天邪鬼など、概して神話伝説では、巨人は神々に滅ぼされ、騎士や勇者ジャックに退治される邪悪なものとしてされている。だが聖アグネスに恋し奸計にかかって死ぬ巨人ボルスターや、遊び相手の人間の子が死んで嘆き、衰弱するカーン・ガルヴァのように、人なつこく少々頭が弱く、不器用で劣等感をもち、ぜんそくや関節炎に悩む巨人も、民間伝承物語には多く登場する。アメリカの開拓時代のポール・バニアン、フランスのラブレールのガルガンチュアも特色ある巨人である。

【参考文献】D・ラーキン『ジャイアント』（井村君江訳、一九八三 サントリー）（井村君江）

清原ひとし

きよはら
ひとし

ギリシア神話 ギリシア しんわ Greek Myths (Mythology)

紀元前八世紀から西暦四世紀ごろまで、およそ二二〇〇年間にわたって成立した大説話群。ホメロスの大叙事詩『オデュッセイア』『イーリアス』などとともに西欧最古にして最大の文学作品群の一つに数えられ、英文学をはじめとするヨーロッパの、ひいては世界の文学に対し、直接間接に及ぼした影響は測り知れない。しかし、物語の内容が広く一般に知られるようになったのは比較的新しく、アメリカ在野の神話学者ブルフィンチによる『空想の時代』（一八五五）によってであった。それ以前は、古代ギリシア語の学習者など一部のエリートによる専有物だったのである。次に内容についてであるが、日本では早くから「神話」として知られている。しかし、Myths (Mythology) の語源をたどると古代ギリシア語の Mutos (つまり「空想物語」ないし「説話」を意味する。確かに、ゼウス（英語ではジュピター）をはじめとするオリンポス山の神々も出てく

るが、彼らの割合は全体の登壇者からみればほんの一部である。大多数は死すべき人間であり、また神々にしても、激しい喜怒哀楽の感情をもち、人間と共通する部分も多い。もう一つ忘れてならないことは、この物語群が奇想天外な空想に満ち、いわばメルヘンの集大成となっていることである。ヘラクレスの怪力にまつわる数々のエピソード、ヘビの髪をもち、見るものを石と化す怪女ゴルゴン・メドウサ、それを退治するペルセウスの武勇、メドウサの血の中から生まれる天马ペガサス、ペルセウスによるアンドロメダ救出の場面にみられる怪物退治、それにつぐ美女奪回とロマンス、イアソンのアルゴ船による冒険とメデシアとの恋につぐ逃走の物語——これらは何百何千とあるモチーフのほんの一部である。これらのモチーフはさまざまな形に変容し、全世界の民話伝説と大きく重なり合う。換言すれば、児童文学におけるフアンタジーの源流は、まちがいに「ギリシア神話」にいきつくのである。

【参考文献】ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話』（大久保博訳、一九七〇 角川書店）、ジュネ『ギリシア神話物語』（有田潤訳、一九六八 白水社）

基督教児童文化協会

きりすときょうかい
ぶんかきょうかい

一九三三年上

沢謙二の提案で基督教童話協会が誕生。月刊誌「光の子」を発刊。全国的に支部がつくられ発展するが、四三年、戦争のため解散。四六年基督教児童文化協会と

して再開。六四年参加者不足で解散。七九年上沢謙二の弟子約一〇名によって「上沢謙二賞」を設け、キリスト教文化功労者を年一回表彰し、協会を復活させる主旨で活動をはじめが、現在子ども会を開くにとどまる。

（大久保みどり）

キリスト教児童文学

きりすときょう
じどうぶんがく

広義には児童向きの

キリスト教の聖書・讃美歌をも含む、キリスト教精神と密接な関係をもつ児童文学を意味し、狭義には、キリスト教の信仰を基盤とする児童文学。日本の場合、切支丹文学時代を経て、鎖国解除後キリスト教禁制撤去による近代化の夜明けのころから、来日宣教師との交流や海外児童文学の移植がはじまる。同時に教義を児童に理解普及させようとする活動が開始される。一八七二年にヘボンと奥野昌綱による「さいはいのおとづれ・わらべてびきのとひこたへ」（児童用教理問答）、八二年三月、三浦徹らの「喜びの音」（前身誌は「よろこばしきおとづれ」一八七六創刊）は、聖書物語・聖者伝・物語・歌と扱い大正期に及んでいる。若松賤子訳『小公子』（九〇・九二「女学雑誌」）、本田増次郎訳『黒馬物語』（二九・三〇）の訳書や、田村直臣（菓鴨子）の小本『幼年教育双書』一〇〇巻の創作お伽噺（〇二・〇六）は注目される。大阪の西阪保治の「日曜世界」（明治末期創刊）の創作お伽噺の出現も同様である。大正期には野辺地天馬、山村暮鳥、沖野岩三郎、村岡花子、上沢謙二

らの活躍が目立つ。続いて小出正吾、高瀬嘉男らの活動や『少年少女宗教文芸書』全六卷(二)と賀川豊彦の童話集『馬の天国』『爪先の落書』(同社刊)がある。児童誌「光の子」(創刊三三)が近代的キリスト教児童文学を大きく推進した。この二年後に上沢の主宰する基督教童話研究会が基督教童話協会と改称、全国的な組織化に乗り出し、同会上沢編『基督教児童文学選集』(三五)を刊行した。「光の子」に掲載された作品集。前述の先覚者たちの努力にもかかわらず不振をかちがちであったのは、キリスト教界内部の確執による不一致が要因の一つであった。第二次大戦中はさらに沈滞した。戦後復活し、出版活動も活発化しことに創作児童文学において今西祐行、北畠八穂、石森延男らが活躍し、その成果が『日本キリスト教児童文学全集』に収められている。

【参考文献】上沢謙二編『キリスト教児童文学』(一九五七・五)五九・一二 キリスト教児童文化協会、『日本キリスト教児童文学全集』全二五巻・別巻二巻(一九八三)八四 教文館(滑川道夫)

基督教童話協会

きりすときょうかい
うわきようかい

きりん

金英一

きん
えいいち

↓キム ヨンイル

銀河^{ぎんが} 少年雑誌。一九四六年(昭21)一〇月

一四九年(昭24)八月、新潮社発行。山本有三が戦後民主主義にとまどう子どもたちのためにと創刊。「赤とんぼ」「子供の広場」「少年世界」「少年少女」などとともに戦後の良心的児童雑誌と評価された。創刊当時の編集長は滑川道夫、編集主任は石川光男。以後高橋健二、吉田甲子太郎らが引き継いだ。前半期は横組み二段でルビを廃止し、平易な漢字を使用して「国民の国語運動連盟」の方針に沿ったが、読者が横組みになじまず後半は縦組みに改められた。原稿はすべて米進駐軍の検閲を経て掲載された。北畠八穂「十二歳の半年」、岡本良雄の『ラクタイ横丁』、国分一太郎の『雨』この村、平塚武二の『ウイザード博士』、詩では村野四郎、田中冬二、與田準一、巽聖歌、そのほか中野好夫、河盛好蔵、吉野源三郎らの文化人が熱っぽく寄稿した。表紙、挿絵は田坂乾、岡鹿之助、初山滋、恩地孝四郎、茂田井武らが執筆、六八ページ四円であった。

(浜野卓也)

金 近^{きん} → チン チン

キングズリー チャールズ Charles Kingsley

一八一九〜七五 イギリスの作家、宗教家。牧師の息子として生まれ、ケンブリッジ大学卒業後、エウアズレイ村の牧師となり、生涯そこを活動の根拠地とした。F・D・モリスの影響によって社会改革運動に力を入れ

た。「人民の政治」誌にパーソン・ロットという筆名で社会的、経済的悪を追求する健筆を振るった。最初の作品『農民の悶え』(一八四八)と『Alton Locke 愛の社会主義』(五〇)は、ともに、産業革命がほぼ終焉をみた時代の貧困・飢え・過重労働・衛生状態の劣悪さを告発する社会小説であった。一八五五年の『Glaucaus: or the Wonders of the Shore 海辺の博物誌』は、大人の雑誌に連載されたものであったが、結果的には、ウィクトリア朝の子どもの海辺の博物誌として愛読された。同年、歴史海洋冒険小説『Westward Ho! おー、船は西行きだ』が書かれ、一一世紀を舞台とした『Hereward the Wake くりワド物語』(六五)とともに大人から子どもまで幅広い読者を獲得した。子ども向きのものとして、我が子に語ったギリシア神話の再話をもとにした『英雄物語』(五六)がある。代表作『水の子』(六三)が書かれる直接の動機は末息子のためということであったが、児童労働に関する政治レポートを読んで、煙突掃除の子どもの実態を知ったこともそのきっかけとなった。教会にいったこともない煙突掃除の少年トムが、水の子となって遍歴し、最後には立派なイギリス紳士になるというプロットの中に、当時の子ども観、ダーウィンの進化論と宗教との統合、ロマンティシズムの文学、社会風潮などすべてが織り込まれ、変動する時代を『水の子』を通じて捉え直してい

る。別世界の中に、世界観を盛り込むスケールの大きいファンタジー作品の先駆的作品となった。(三宅興子)

金港堂 きんこうどう

明治時代最大の教科書出版会社。一

八七五年(明8)岐阜の人、原亮三郎が横浜に創業。翌年日本橋本町に移転。文部省蔵版教科書の翻刻から出版し、各種の教科書類を出版。とくに『小学修身書』などの大当たりによって巨富を築き、原は東京書籍商組合(一八八七 創立)の初代頭取に推された。八六年三宅米吉、新保盤次を招聘して金港堂編輯所を設立、近代教科書への刷新を図る。また、学術雑誌『文』、文芸雑誌『都の花』を創刊、二葉亭四迷『浮雲』、幸田露伴『露団々』などの文芸書や演劇書を続々と出版し黄金時代を迎えた。一九〇二年教科書会社の過当競争に端を発した教科書疑獄事件が勃発。このため小学校教科書は国定(一九〇四)となり打撃を受けた。これより『金港堂お伽噺』シリーズをはじめとする小型大衆児童向けの安価本各種シリーズを出版して庶民層の子どもたちに普及した。また、雑誌への路線変更も『少年界』『少女界』など七大雑誌を発刊したが、時流に乗れず明治末にはすべてを手放した。以後は目立った活動もなく二流の存在で終わった。

金港堂お伽噺 きんこうどう おとぎばなし

叢書。一九〇〇年金港堂は、

教科書出版界に覇を唱えてさらに青少年、児童向け出版に乗り出す。〇二年に『少年界』『少女界』を創刊し、

(稲岡 勝)

続いて小型三二ページ金三銭の叢書『金港堂豪傑談』と『金港堂修身お伽噺』を刊行して好評を得た。博文館の高価な児童書に対抗する措置でもあったが、庶民層の子どもに読書を広めようとする社長原亮三郎の意図があった。〇三年から昔話一〇冊の『金港堂お伽草紙』をはじめ『おとぎばなし大博覧会』一二冊、『お伽噺十二ヶ月』『お伽噺夏休』『戦争十二ヶ月』『おとぎばなし十人十色』『教育勅語おとぎばなし』など一〇一

二冊の叢書を続刊した。標題の『金港堂お伽噺』(一〇〇冊)は一九〇二年(明35)より刊行が開始された。登張竹風の『薔薇嬢』『狼と小羊』(グリム)、平尾不孤の『マツチ売りの小娘』(アンデルセン)などの外国種もあるが、大部分は創作お伽噺である。主な執筆者に武田仰天子、草村北星、神谷鶴伴、三島霜川、岡本綺堂、磯澤水、松居松翁、福田琴月、森桂園などの作家や池辺藤園(義象)、佐々醒雪などの学者もいる。金港堂教科書執筆者および同社の編集部員をも含んで多彩であった。学校の賞品用に一〇一五冊ずつの総クロス造本の合本として大正初期に及んでいる。上述の各シリーズの総称としても『金港堂お伽噺』が用いられた。(滑川道夫)

金素雲 きんそうん

↓キムソウン

キンダーブック

大正・昭和前期の代表的子ども絵

雑誌の一つ。一九二六年の『幼稚園令』で保育項目に「観察」がつけ加えられたことが契機となって、二七

年(昭2)十一月にフレール館より創刊、編集顧問は倉橋惣三。創刊号は「お米の巻」と題され、B5判で三二ページ、多色刷りのもので定価五〇銭、初版は約三〇〇〇部。第二号「乗物の巻(其一)」(二八・三)はB4判で発行されたが、以後、原則として一号で一つの題材を取り扱うという編集方針が貫かれ、「観察絵本」と称せられた。また観察の補助教材とすることが目的であったため、幼稚園への直接販売方式を開拓した。西条八十、千葉省三、浜田廣介などの童話作家を起用し、また、画家も、当初的場朝二、藤沢龍雄、十亀広太郎に加え、武井武雄、川上四郎、河目悌二、清水良雄などの童画家も起用するようになった。創刊当初の隔月刊から、保育現場からの支持などにより、月刊雑誌(二九・一)となり、付録の母親向け雑誌「ツバメノオウチ」も創刊(三三・四)された。このころ、一冊を一人の作家と一人の画家で貫く「物語絵本」も試みられるようになった。四二年、フレール館が社名を日本保育館と改めるのに伴って誌名を「ミクニノコードモ」(四四・一終刊)と変更、さらに雑誌統合令によって「日本ノコードモ」(四四・四 創刊)に吸収された。四六年八月に復刊され、現在に至る。

【参考文献】『フレール館七十年史』(一九七七 フレール館)

銀の鈴 すずの 一九四五年(昭20)一〇月、敗戦直後

(長戸優子)

に、広島印刷株式会社が母体の広島図書株式会社・松井富一によって創刊された学年別児童雑誌。誌名は対象によってぎんのすず、キンノスズとも。名実ともに長田新の監修を受け、坪田譲治・森田たま、平塚武二、西条八十らが執筆した。印刷と造本が抜群であり、欧米の自由で豊かな文化の香りもよく伝えられた。直接販売によって部数を伸ばしたが、五四年ごろまでに隆盛を終えた。発行所は東京に移って松濤書房、さらに大阪に移った。児童文学作家佐藤さとる、きりぶち輝、北川幸比古が編集部に在籍、また佐伯千秋はこの雑誌で初期の執筆活動をした。社長松井富一が原爆症で歿後、幼稚園・保育園児向けの直接販売による月刊絵本を株式会社ぎんのすずが発行している。(北川幸比古)

金の船 → 金の星

金の星 はきの 童話・童謡雑誌。一九一九年(大8)一

一月、キンノツノ社から「金の船」という童謡童話雑誌が刊行された。編集人斎藤佐次郎、発行人横山寿篤である。前年七月に創刊された雑誌「赤い鳥」の刺激を受けての創刊であることは一目瞭然である。表紙、口絵ともに岡本帰一。口絵裏に「金の船」曲譜その一が載っていて、童謡は野口雨情、曲譜北村季晴である。本誌の童謡は若山牧水、野口雨情、西条八十が執筆、童話は沖野岩三郎、有島生馬、斎藤佐次郎、横山壽篤など一二編が載っている。興味深いのは山本鼎の「子

【参考文献】『雑誌「金の船」金の星」複製版別冊（解説）』（一九八三 ほうぶ出版）（桑原三郎）

供の自由画を募る」が載っていることで、「赤い鳥」では、機会があれば山本鼎選の児童自由画を誌面に紹介したいと一九年七月号で記していた。「金の船」に先を越されたのであった。つまり「金の船」創刊号で示した編集方針は、新しい芸術としての童話と童謡の開拓であって、「赤い鳥」の路線と異なったスタッフで展開しようとしたものであった。二号以下の主な執筆者をあげると、童謡に三木露風、人見東明、百田宗治、曲譜に中山晋平、本居長世、童話に長田秀雄、島崎藤村、与謝野晶子、志賀直哉、小山内薫、前田晁、窪田空穂、鈴木善太郎、田山花袋、吉田絃二郎、楠山正雄、若山喜志子、田中純、馬場弧蝶、秋庭俊彦、中島孤島などがある。二二年（大正）六月、「金の船」は「金の星」と誌名を変更。編集主幹であり出資者であった斎藤佐次郎がキンノツノ社から独立しなければならなくなり、自ら金の船社を主宰したからである。金の船社は、まもなく金の星社に変わる。改名後も本居長世、沖野岩三郎を顧問に、野口雨情、岡本帰一を同人として従来通りの編集を貫いた。その後の新たな執筆者には、童画、落谷虹児、寺内万治郎、童謡、浜田廣介、曲譜、小松耕輔、藤井清水、童話、小島政二郎、豊島与志雄、菊池寛、久米正雄、宇野浩二、武井武雄、江口渕、竹久夢二、大木雄二、久米元一などがある。二九年（昭四）七月廃刊。八三年はるぶ出版から復刻版が刊行された。

金の星社

しんやのほ

児童図書出版社。成立は大正期の

児童文芸誌「金の船」創刊時（一九一九・二〇）にさかのぼる。すなわち斎藤佐次郎は横山寿篤のキンノツノ社名儀のもと、実質的な編集発行人を務めた。やがて横山と訣別して誌名を「金の星」に改め（二二・二六）て金の船社、ついで金の星社に定めた（二二・二一）。斎藤は現役のまま六三年歿。一貫して有力な児童書専門出版社であって、「金の船」「金の星」の刊行（一九・二一・二九・七）、「子供の本なら金の星社」と呼ばれた大正末・昭和はじめの全集合戦の時期、『日本童話名作選』（童話作家協会編1―5集）などを刊行した昭和一〇年代、戦後現代の貢献と、果たした役割は大きい。（宮崎芳彦）

金平本

きんぺいほん

近世（江戸時代）初期一六五五年（承応

4）ごろから主として江戸・上方を中心に上演された金平浄瑠璃の正本。坂田金時の子金平が頼光四天王の子たちと悪人や怪物を退治する勇壮な物語で、挿絵には金平の大柄で目を怒らしたただけしい風貌が描かれるところに特色があった。その自由な活躍は中世的な伝統主義から離脱しようとする近世初期の自由な空気を反映したもので、一時期町人に非常に歓迎されたが、やがてその粗雑な作劇表現がしだいに飽きられるようになった。雄武的な内容から子どもにもてはやされ、

のちの児童向け武者絵本類に影響を与えた。(小池正胤)

訓蒙図彙

ずいも

日本最初の啓蒙的な挿絵入り百科

事典。中村惕斎の編、江戸前期、一六六六年(寛文6)に京都の山形屋が公刊した。二〇巻一四冊。天文・地理・居処・人物・身体・衣服・宝貨・器用・畜獸・禽鳥・竜魚・虫介・米穀・菜蔬・果蔬・樹木・花草など二二八項目にわたり事物の名称を列挙して、一つ一つ正名・異名・和名・俗称を記し、その形状を図示してある。版を重ねて庶民の間に普及したのみならず、『武具訓蒙図彙』(二六八四)、『女用訓蒙図彙』(八七)、『人倫訓蒙図彙』(九〇)などの類書を輩出した。(石川松太郎)

吟遊詩人

しんゆう

中世フランスのトルヴァドゥール

などの訳語として日本で使われていることばだが、誤解に基づいた訳語である。トルヴァドゥールは、現在というシンガー・ソング・ライターであり、宮廷お抱えの芸術家であった。したがって、宮廷抒情詩人と訳されるべきものである。フランスでは、放浪しつつ、歌い、演奏した旅芸人は、ジョングルーと呼ばれる、トルヴァドゥールとは全く別の立場であった。

金耀燮

きんよう

↓ キム ヨソプ

(小澤俊夫)

ク

寓話

ぐわ

ラテン語で、つくり話を意味する

fabulaの訳語として、明治期に考案されたことばである。ヨーロッパで寓話の始祖とされるのが、紀元前六世紀のアイソポス(アイソップ)の寓話である。アイソップはフリギア人で、その寓話がギリシア語で記録された。それは約四〇〇編の短い話で、完全に擬人化された動物が登場人物となっている。内容は処生訓ないし、人生の隠れたる真実を解き明かす話である。一世紀になると、ラテン語による寓話が書かれ、中世には、各国にイソップ寓話が広がった。教会が、説教用にイソップ寓話を用いたからである。それが、イエズス会の宣教師によって日本にもたらされたのが、天草本『イソポのハブラス』(一五九三)である。これは、ヨーロッパの文学が日本語に訳された最初のものである。現在、日本の口伝え昔話の中に、イソップ寓話によく似た話が散見されるが、それはこの翻訳が、長い年月の間に、